

「アマゾンおケイ」の肖像

小川和久

装丁・ブックデザイン

大森裕一



1938年頃のフサノ(中央。母ミセ、姉ミシと)

プロローグ……………10

第1部 地の果てへ 十三歳の船出……………15

第1章 青天の霹靂……………16

芸者に出るか、女工になるか

ブラジル移民の起源

神戸メリケン波止場

シンガポール

ケープタウン

鉄の鮫の海

サントス

第2章 ノコギリ山のファゼンダ……………37

サンパウロ移民収容所

ファゼンダ・ダ・セーハ

移民小屋は家畜と同居

パトロン一家の視察

国籍不明の汁かけ飯

スベイン風邪

小銃と拳銃を撃つ

縁談の相手は四十男

線路伝いに八十キロメートル

移民は棄民

第3章 青春のサンパウロ……………64

十三人の聖職者の村

邦字紙『伯刺西爾時報』

伯爵夫人の館

キャリアアツブ

アマゾンおケイ

関東大震災

ブラジル革命のバリケード

祖国へ

第4章 金と銀のトウシユーズ……………93

ルーツ

シヨードンサー

カフェ「タンジー」

第II部 上海 恋と戦火と幸運の女神……………113

第5章 上海航路……………114

一等船客

アスターハウスホテル

ケイト

陳伯藩

上海ビジネスカレッジ

第6章 アメリカの副領事……………130

身の上話は出まかせ

恋

日本の旅

個人教授

国際都市という教室

『籠の鳥』

傷心

第7章 幸運……………153

共同租界

上海事変

陵辱

マダム・ジンジャロフ

本当に天から降ってきた

若き金利生活者

すれ違い

第Ⅲ部 大恐慌に起つ 小川組の印半纏……………175

第8章 渋谷鉢山町四十四番地……………176

新宅まつる

お屋敷町

恐慌に起つ

アパート経営

鉢山町のドイツ人一家  
通州事件、そして南京事件  
法律家グループ  
エルンスト・ストーリーの抵抗

第9章 「私はこうして成功した」……………197

貸家業からアパート経営へ  
ユダヤ人の双子  
鶴沼の別荘  
来客たち  
戦時下の社交界

第IV部 戦雲……………225

第10章 一代の成功者……………226

ヘミングウェイとマーサ  
天下の鎌倉  
歌姫・関屋敏子の死  
ニイタカヤマノボレ  
ドーリットル空襲  
敗戦への序曲

第11章 憲兵政治の魔の手……………246

情報機関の誕生  
自死を思う

愛犬毒殺

鎌倉署の敏腕刑事

東京大空襲

疎開

スイス・ベルン 一九四五年初夏～夏

第V部  
斜陽……………269

第12章  
進駐軍専用列車……………270

炎天下の玉音放送

上海 一九四五年秋

オムツを担ぐMP

CIAとのリエゾン

GHQからの申し出

浅野男爵

鎌倉の駆け込み寺

ケンブリッジ・ファイブ

第13章  
出版社PREVIEW……………292

ロバート・ブース

材木座の日々

白い制服の列車ボーイ

由比ヶ浜の家

アメリカ人のような母

田舎暮らし

第14章 ラストボロフ事件……………307

CIAとMI6の暗闘  
紙芝居屋の軍隊ラッパ

第VI部 私はハミルトン夫人だった……………319

第15章 最後の挑戦……………320

斯の身飢ゆれば  
鶴沼のフーパー大佐一家  
Aサインバー  
夜叉の顔  
再び二見へ  
吉田家の一年  
血は水よりも濃し

第16章 行商人、山道を行く……………333

CIAよりCIAらしい男  
アイ・ワス・レイディー・ハミルトン  
長い灰色の線

エピソード……………347  
取材ノート 母の生涯をたどる旅……………350  
参考資料……………359

## ブローグ

一九二四（大正十三）年十二月、小川フサノは横浜に近づきつつある船上にいた。

まだ、ケイコ、小川桂子とは名乗っていない。

十三歳にしてブラジルに移民として渡り、二十一歳のいま故国の土を踏む。

それも、行きはアフリカ大陸南端のケープタウンを経て南米大陸に向かい、今度はブラジルからメキシコ湾岸、パナマ運河を抜け、太平洋を渡ってきた。船乗りや外交官、貿易商ならいざ知らず、こんな若さで世界を一周した女はあまりいないだろう。

富士山が水平線に姿を現した日、暗くなるのを待ってフサノは紙包みを船縁から海に沈めた。

ブラジルのファゼンダ（コーヒー農園）を抜け出して以来、肌身離さず隠し持っていた拳銃と鋭利なナイフだった。ナイフは現地でファツカと呼ばれるものだ。

これから自分が生きていくのはコーヒー農園でも、悪さをしそうな連中がたむろするサンパウロの下町なんかじゃない。祖国日本だ。ナイフを持ち歩く必要はないだろう。まして拳銃などとうんでもないことだ。脳みそを働かせて生き抜いていく。それも淑女として。

フサノは、寄港地のニューオリンズで買った英字新聞に拳銃とナイフをくるむとき、小さな武器

をじつと眺めた。使い込まれた銃把の部分にS&Wの刻印が見えた。有名なアメリカの銃器メーカーが作った殺傷力の強い武器だが、それを知るのはまだ先のことだった。

サントスからメキシコ湾岸に点々と寄港し、パナマ運河を抜けてロサンゼルスに寄り、ようやく八十六日目の明朝、横浜に入港する。八年ぶりの祖国だ。

\*

これから語るのは、一九〇三(明治三十六)年に生まれ、二〇〇〇(平成十二年)に世を去った、文字通り二十世紀の激動と人生をともした、ひとりの女性の物語である。

彼女は、女性としての自立を目指し、頑ななまでに女同士で群れることや男からの援助を拒み続けた。そして底辺から一度は成功の頂点へ駆け上り、日本の敗戦によって斜陽の坂道を転げ落ちるが、それでもわが子を守り、懸命に九十七年の人生を生き抜いた。

小川フサノ——私の母である。

二十世紀とともに母を見送ってから、いつか母の物語を書こうと思いつつ、月日が経ってしまっ

た。幼い頃から聞かされた母の思い出話と、残された書類などを基礎資料としながら、母が人生を過ごした様々な土地での物語を調べていったが、すいぶんな時間を要することになった。私にとって、世界中に散らばった小さなジグソーパズルのピースを探し、ひとつずつ空隙を埋めていくような、母の生涯をたどる旅であった。

長い旅のはてに明らかになったのは、まさに天国と地獄の双方を味わい尽くした母の人生だった。

しかし、その物語のなかの母は、自分がレディーであったことをかたときも忘れず、いついかなるときでも、凜とした女性として一度たりとも誇りを失わなかった。

母の人生がいかに破天荒なものであったか、母がいかに自立心溢れる女性だったかは、冒頭の一節からも想像していただけるだろう。

この後、読者のみなさんは母の物語を読み進めていくうちに、百年ほど前の出来事まで含めて、なぜこんなに詳しく母のことがわかったのかと疑問を持たれるかも知れない。

ご説明しておくなら、本書の大筋とその時々<sup>の</sup>の思ひは、繰り返し母から聞かされていたもので、それを私はノンフィクションの手法で裏付けをとっていった。裏付け作業の結果、母の話の九五%以上が正確であり、不正確な部分もかすかな記憶違いにすぎなかった。傍ら<sup>かたわら</sup>で見っていた以上に、母がいしゃんと背筋を伸ばして生きた女性であることに驚かされた。

母ひとり子ひとりという、普通の母子よりずっと近い関係が目には浮かぶだろう。しかし、私たちは違った。母と私の間には目に見えない壁があり、お互いを強く意識しながらも互いに交わらない人生を歩むことになった。だからこそ、本書の執筆にあたって、母を突き放して見ることが可能になった面がある。

母は、自ら口にしていたように「風変わりなお母さん」であり、普通の「お母さん」とは違っていた。アメリカ女性のような風体と立ち居振る舞いだったことが大きい。特に男尊女卑を絵に描いたような男性には衆人環視の中であろうと高飛車なもの言いをして、追い払った。それも英語で。

これはブラジルや上海で暮らし、日本に帰国してからも欧米人と関わる中で染みついたものだろう。しかし、私は一緒にいて、恥ずかしくて、居たたまれない思いにとらわれることも多かった。

そして、四十二歳で私を産んだという祖母のような年齢差と、白髪を染めずに通した外見。そんな母が私は苦手で、どこかで割烹着を着た若い母親を探し求めている。

しかし矛盾するようだが、私は心の内でいつも母と一緒にいた。母は私にとつて絶対になくはない存在だった。見よう見まねで母と同じように、どの宗教でもない「神さま」に祈ってから床につくのが、幼年期からの私の習慣だった。そんな私が、九十七歳で母がこの世を去る前夜まで祈り続けたのは、「母が死なないように」という、ただ一事だった。だから、母から言われた「夜、爪を切ると親の死に目に会えない」という教えも二、三回の例外を除いて守り通した。

特に、母が老年期に入る頃には、四十二歳年長の母がいつ死んでもおかしくないという思いが強迫観念のように強まり、自然と母との思い出を反芻し、母の言葉を一層強く自分の胸に刻み込むことになった。だからこそ、この本を書けたのだと思う。

それでは一九一七（大正六）年春、神戸のメリケン波止場から母の物語を始めよう――。



第I部

地の果てへ 十三歳の船出

## 第1章 青天の霹靂

### 芸者に出るか、女工になるか

日本のブラジル移民の歴史の中で、一九一七（大正六）年四月二十日は過去三年にわたる中断の  
のち、本格的に渡航が再開された日として記録されている。

その日の夕刻、十三歳の小川フサノは、メリケン波止場の岸壁に横着けされている「若狭丸」を  
見上げていた。自分はこれから、この船に乗る。そして、地球の裏側に行くのだ。ブラジルという  
国へ。

フサノはまだ、自分に降りかかった運命をよく理解していなかった。まして、前途に波瀾に満ち  
た人生が待ち構えているなど、つゆほども想像していなかった。

\*

十三歳の少女にとって、それは青天の霹靂へきれきとも言うべき出来事だった。一九一七（大正六）年、  
熊本県葦北郡二見村あしたふたみの尋常小学校を出た小川フサノは、実家の手伝いをしながら自分の行く末を考  
えているところだった。そこにブラジル行きの話が降って湧いたのだ。とつくに桜が散った二見の

村では、阿蘇宮の楠の神木の張りだした枝に新緑が勢いよく芽吹いていた。

正直なところ、フサノはブラジルには行きたくなかった。大人たちの話では地球の裏側だということではないか。教科書で習った東京よりも、もつと遠いところだろう。しかし、食い詰めた小川家である。子沢山のこともあり、なるべく口減らしをしなければならぬ。既に長女のミシは大阪で芸者に出ていた。八歳で生家没落の憂き目に遭つたミシは、ほとんど読み書きができないまま七十六年の生涯を過ごした。キリツとした姿勢を崩さなかつたミシは、傍目にはそうとは見えなかつたが、フサノには不自由を押し隠して懸命に生きていることがわかり、姉が不憫でならなかつた。

フサノは一九〇三（明治三十六）年五月二日、生家のある熊本県葦北郡百済来村小川内（現・八代市坂本町百済来上）から南東に十一キロメートルほど離れた白石という村の辻堂で、父・小川三次、母・ミセの次女として産声を上げた。生まれ落ちた場所からして、前途の多難さを予感させるものだった。白石は日本三大急流のひとつ球磨川の中流に位置する。まだ小川家が没落する前のことで、三次が身重の妻と使用人を連れて山林地主として山仕事に出張っている途中、ミセが産気づき、辻堂での出産となつたのだ。兄弟姉妹は、長男・善信、長女・ミシ、次女・フサノ、次男・武夫、三女・トジユ、四女・シノブ、三男・安貞、四男・典太の八人。武夫を除く男子三人は夭折した。ミセの実家は百済来より山ひとつ八代海寄りの二見村の中心部・下里にあり、ミセは豪農本村家で三男三女の長女として生まれた。父親の壽作は篤志家で、八代海の干拓事業にも積極的になり出し、今日の八代市郡築地区の最初の入植農家はほとんどが壽作の子孫である。いまでも下里の二つの辻堂には建立した壽作の名が刻まれている。庶民の嫁入りは夜が普通だった当時、ミセは昼間に

三次のもとに嫁いだ。ダンス、長持ちを連ねた花嫁行列は長く語りぐさになった。

一九〇五（明治三十八）年、フサノが二歳の時、小川家は没落する。三次が保証人の受け判をしていたことである事件に巻き込まれ、山林と農地のほとんどを失ってしまったからだ。事件では代書など何人もが捕縛され、獄につながれた。のちに長女のミシは、「お日さまが西から上がっても東が潰れることはない、というくらいだったのが潰れて、大騒ぎになった」と思い出を語っていた。東とは小川家の屋号である。

小川家は不思議な家である。明治の戸籍の身分では平民となっているが、火の国葦北の国造の子孫とも、京都から流れてきた公家の末裔ともいわれてきた。明治に至るまで白馬に騎乗することを許され、三次は六歳のおり、西郷隆盛の軍勢が熊本鎮台を攻めるために北上して行くのを白馬にまたがって見送った。昭和天皇の大喪の礼で皇宮警察本部の護衛部長を務めた遠縁の中村照義が村の古老に聞いたところでは、いつも小川家の当主は白装束に身を固めており、衣服に田畑の土などが飛ぶことはなかったという。没落後も、三次と口をきくとき村人は土下座していた。

一八七一（明治四）年生まれの子は道楽者で、フサノが生まれる前の明治の中頃、一二歳下の弟・米作と二人で日光まで遊山の旅に出かけ、京都の祇園や島原、東京の吉原などを遊び歩いた。鉄道が開通していない行程は駕籠に乗って移動した。三次は棒術の達人で、米俵二俵、百二十キログラムを背中に乗せて歩くほどの力自慢だった。

小川家の破産で、フサノたちは母ミセの生家・本村家を頼って二見村の下里集落の最も奥、馬場と呼ばれる土地に小さな家を構えた。ここは戦国時代までは園田城があり、その馬術練習場の跡地

である。背後の路木岳ろぎの山頂には親戚である赤星家あかはしの金干城きんかんじょうがあった。

フサノが生まれた一九〇三（明治三十六）年、東北地方は前年から十年あまり続くことになる北日本大冷害のただ中にあり、平年作か凶作かを分ける七月の平均気温二十度を大幅に下回る日々にあつて、農民は困窮に喘いでいた。それでも三月には大阪で内国勸業博覧会が開かれ、入場者五百三十万人を記録し、日本で初めてメリーゴーランドやイルミネーションが披露された。ライト兄弟がわずか十六馬力の複葉機で人類初飛行を実現した年でもあつた。

五年生になつたフサノは九歳年下の妹トジユを背負つて尋常小学校に通つた。二階建ての木造校舎は全国に小学校が建てられた明治初期の建築で、杉の床板の節穴から下の教室が見えた。

フサノは勉強もできたが、おどつぱすでも有名だつた。この土地の方言でお転婆、跳ね返りといつた意味だが、フサノは喧嘩でも男に負けた事がないのが自慢だつた。

二見村には君が測とおちか測という二見川の測がある。両方とも悲しい恋物語の中で身を投じた若い娘の名前を取つたもので、君が測が村の子供たちの遊び場となつていた。君が測の上には大きな岩が張りだしていて、そこから子供たちは測めがけて飛び込んだ。もちろん、いつも先頭で飛び込むのはフサノだつた。

背中のトジユをあやしながらとはいえ、フサノは勉強が楽しくて仕方なかつた。教わるものは何でも吸収できた。だから女学校に行きたいと思つていた。しかし、それは叶わぬ夢だともわかつていた。漠然とした不安も感じていた。村の娘たちの多くと同じように紡績工場の女工に行くか、もしかしたら姉のミシのように芸者にされるかも知れない。それでもフサノは、どんな境遇に置かれ

ようとも、いつか必ず高等女学校で勉強するのだと心に決めていた。そんなある日、母ミセの弟・本村末廣すえひろがブラジルに移民するにあたり、家族に加えられることになったのだった。

末廣はミセの十歳下の弟で一八八七（明治二十）年生まれ。父・壽作が開いた八代郡郡築村の干拓地に家を建てて暮らしていた。家は球磨川の河口の近くにあり、末廣は貧しさとは無縁だったが、一旗揚げるつもりでブラジルへの渡航を思い立った。三十歳だった。移民会社の募集広告はコーヒーを「金のなる木」と呼んで人々の射幸心を煽っていた。

この頃のブラジル移民は、労働力確保を目的としており、三人以上の家族構成が条件だった。子供のいない末廣夫婦だけでは移住許可が下りない。それでフサノを構成家族に、と末廣がミセに頼み込んだのだ。出発前に八代の写真館で撮った写真には、叔父の本村末廣はなむかと妻ツノ、そしてフサノが写っている。ツノは末廣と同じ郡築村の八永家の出で、三歳年下。二カ月前に祝言を挙げたばかりだった。三人とも和服姿で、末廣とツノは紋付き、フサノはしわを伸ばした木綿の袴あわせを着ている。ツノの髪型は日露戦争に勝利した直後に流行った「二百三高地」。フサノはひつつめた髪を後ろに束ね、色白の地肌がわからないほど日焼けした田舎娘の風貌をしている。隣に座るツノよりひとまわり以上も小柄で、いたいけな子供だとわかる。緊張した面持ちには、見る者の胸を詰まらせる。

末廣たち三人は、神戸のメリケン波止場近くに建ち並ぶ木造二階建ての移民宿に入り、自分たちを乗せてブラジルのサントス港に向かう移民船・若狭丸に乗船する日を待った。移民宿は働き盛りの男たちと、その半分ほどの人数の女たちでこった返し、男たちが発散する精気と絶え間なく人が

出入りする便所の臭気が混じり合い、そのすえた臭いで息苦しくなるようだった。

メリケン波止場 一带には数十軒の移民宿がひしめいていた。一九〇八（明治四十二）年、第一回移民が笠戸丸かさとまるで出港することが知れると、移民宿の建築ラッシュが始まった。笠戸丸の移民は七百八十一人だったが、その後、一隻当たりの移民は千人単位となり、その数倍の見送りの家族や縁者が利用することで移民宿は活況を呈した。移民宿は一人一泊五十銭。出港まで家族単位で一週間平均は逗留するから、千二百人の移民を乗せたフサノたちの若狭丸の場合、見送りを含めて五千円とか七千円といった大金が一带の移民宿に落ちることになる。巡査の初任給が十二円の頃だから、莫大な金額である。

移民会社のほうも好調で、一九〇〇年代に入る頃には、移民会社は六十社近くにのぼった。移民からの送金は日本の国内経済を支える貴重な外貨だったし、仮に移民が送金できないほど困窮していたとしても、口減らしの役には立っていた。最大の移民会社である皇国殖民会社の事務所は吉野ホテルにあり、芸者を上げてのどんちゃん騒ぎも連夜のことだった。移民周旋人が移民を騙してなげなしの金を巻き上げる悪辣な詐欺行為も横行していた。

出港を待つ間にフサノたちは神戸の街で洋服と靴、帽子を買った。『渡航者心得』に「一切日本服を持参すべからず」とあったからだ。船内はともかく、サントスに入港するときには洋服姿でなければならぬ。叔父の末廣は三人それぞれが身の回りの品を入れる信玄袋を三つ、毛布を一枚ずつ、手ぬぐい、それに自分用の中古の背広と頑丈な編み上げ靴、ワイシャツ、ネクタイ、メリヤスの下着類と靴下を買い込んだ。末廣の妻のツノとフサノはブラウスとロングスカート、帽子、長靴

下、女物の編み上げ靴を仕入れた。宿で試着してみると自分が外国人にでもなったように思われたが、似合っているかどうかなどわかるうはずもなかった。

フサノたちが乗ることになった日本郵船の若狭丸は、最初の移民船・笠戸丸から数えて九回目の船だった。若狭丸にとって三回目のブラジル行きは四月二十日出港と決まった。

## ブラジル移民の起源

ところで、日本人はどのような経緯をたどってブラジルに移民するようになったのか。国立国会図書館編『ブラジル移民の100年』（国立国会図書館HP）は次のように記している。

日本からのブラジル移民の話は一九〇五（明治三十八）年に持ち上がった。ブラジルの日本公使館は一八九七（明治三十）年八月、リオデジャネイロ州ペトロポリスに設置され、初代公使は珍田捨巳（すてみ）が務めた。珍田のあとに着任した杉村濬公使（すぎむらつかし）が謁見したおり、ブラジルのカンポス・サレース大統領から移民の話が提案され、杉村はただちにサンパウロ州を視察した。そこで杉村は日本移民への期待が高いことを知り、移民反対論者から転じて移民奨励の復命書を提出することになった。ちなみに杉村は一八九五（明治二十八）年十月、反日的な朝鮮王妃の閔妃（びんひ）を殺害した首謀者の一人とされている。

杉村公使の復命書は、一九〇五（明治三十八）年の年末までに外務省通商局の海外通商情報誌『通商彙纂』、『大阪朝日新聞』の順で掲載され、全国各地から外務省に問い合わせが殺到するなど大きな反響呼んだ。朝日新聞の記事を読んで、ただちにブラジルに渡航した者も出たほどだった。移

民先として、ブラジルは北米、ハワイほど人気はなかったが、ペルーよりは好まれていた。

移民を送り込むのは民間業者の業務となった。ブラジル移民事業の先達の一人となる水野龍は、みずのりょう当時は新興の移民会社・皇国殖民合資会社の業務担当だったが、杉村の復命書を伝える新聞記事を読み、十二月にはブラジルに向かっていた。

二度にわたってブラジルに渡った水野は、日本移民にとつて障害となっていた家族移民を必須とする条件などについて法律改正を勝ち取り、一九〇七（明治四十）年十一月、サンパウロ州政府のボテリョ農務長官と契約調印に至った。

家族が条件とされたのは、ブラジル側が移民の定着を希望していたからだ。それまでの日本移民は基本的に単身の出稼ぎ労働者だった。家族単位となると募集は容易でなかったが、水野は粘り強く交渉し、ブラジル側は「家族らしく見えればよい」というところまで譲歩した。

皇国殖民会社が一千人の移民を募集した結果、翌年四月末の出港までに七百八十一人をかき集めることができた。男六百人、女百八十一人の内訳は、沖縄県三百二十五人、鹿児島県百七十二人、熊本県七十八人、福島県七十七人、広島県四十二人など。このほか十二人が自由移民として応募した。職業も警察官、教師、僧侶、車掌、活版工など様々だった。農業移民のほすが、農業以外の職業の者が多数を占め、赤の他人同士が家族を装った「構成家族」も数多く含まれていた。

応募したのは、まとまった渡航資金を工面できる多少なりとも資産のある人々だった。

渡航費は、渡航支度費用二十円ほど、旅行用印紙代一円、渡航周旋料二十五円、サントス港までの汽船賃六十円（十二歳以上）、検疫及び消毒費種痘料等二円七十五銭、はしけ賃及び手荷物運搬料

五十銭ほど、乗船地宿泊料三円ほど、準備携帯金二十円、郷里から乗船地までの汽車賃——計百三十二円二十五銭と汽車賃（『ブラジル移民の100年』）。巡査の初任給十二円の十倍以上で、地球の裏側までの運賃というだけのことはある。

第一回移民のためにチャーターされたのは東洋汽船会社の笠戸丸（総トン数六千一十トン）。定員は一等三十六人、二等四十人、三等四百五十一人の合計五百二十七人だったが、七百八十一人の移民全員を乗せるために船倉を改造して蚕棚のような寝台をしつらえ、移民はサントスまでの五十日あまりをそこで寝起きすることになった。

笠戸丸は四月二十八日に神戸を出港し、シンガポール、喜望峰経由で六月十八日、サントス港に到着した。移民たちはサントスからサンパウロまで列車で移動し、六月二十五日まで移民収容所に滞在した。収容所といっても、当時の日本の生活水準と比べて近代的な設備が整っていた。

移民たちの身分はコロノと呼ばれる農業労働者だった。移民たちはコーヒー農園のことを「耕地」と呼んだ。やがて、移民は耕地を「植民地」と呼び習わすようになる。あてがわれた掘っ立て小屋には床板すら張られておらず、土間に寝泊まりするところからブラジルでの生活は始まった。九年後にブラジルの地を踏むフサノも、まったく同じ暮らしを味わうことになる。

しかし、軌道に乗ったかに見えたブラジル移民事業も第八回で中断を余儀なくされることになった。一九一四（大正三）年になってサンパウロ州政府が州経済の低迷と日本移民の定着率の悪さを理由に契約を解消し、渡航費の補助も打ち切ったからだ。

再び日本移民がブラジルの地を踏むのは第九回のフサノたちの組で、中断から三年後の一九一七

(大正六)年のことだった。おりしもブラジルでは、第一次世界大戦でヨーロッパからの移民が途絶え、労働力の供給が急務となっていた。

### 神戸メリケン波止場

フサノたちは気づいていなかったが、若狭丸が漕ぎ出したのは世界のうねりの真つ只中だった。

一九一四年、オーストリア<sup>II</sup>ハンガリー帝国の皇太子暗殺をきっかけに火を噴いた第一次世界大戦は、西部戦線での塹壕戦の膠着から海洋での潜水艦戦へと新たな局面に転じつつあった。イギリスと日英同盟で結ばれていた日本は、イギリスのあとを追ってドイツに対して宣戦布告し、日本の商船はドイツ海軍の餌食にされる危険に直面していた。日本の隣国の支那でも一九一二年、辛亥革命を受けて南京で中華民国が誕生していた。

しかし、フサノや移民たちが耳にする情報は限られていた。そんな出来事が世界中で起きているとはつゆ知らず、緊迫感などとはおよそ縁遠いノンビリした雰囲気の出となった。

四月二十日夕刻、フサノたちを乗せた若狭丸は神戸を出港した。遠ざかっていく六甲、摩耶<sup>ま</sup>の山並みが、いやがうえにも旅情を掻き立てた。デッキから見送りの人々に手を振っていた広島訛りの男が呟いた。「神戸の街は海側から見るのが一番じやいいうけど、ホンマやなあ。右の一番高いのが六甲山、真ん中が摩耶山、左が再度山<sup>ふたたび</sup>いうらしいが。フタタビヤマ、再び戻ってこられるかのぉ」。渡された旅券には、「契約移民としてブラジルに赴く前記の者」と記されていた。伯刺<sup>ブラジル</sup>西爾移民組

合と契約しているフサノたちは二年間、ブラジルの農園で汗を流すことになっていった。

船上から投げられた色とりどりの紙テープの端を岸壁の見送り家族が握りしめ、遠目に見る若狭丸は極彩色に塗られた遊覧船のようだった。

神戸港を出た若狭丸は、淡路島を右手に、左前方に紀伊半島の山々を眺めながら紀淡海峡を抜けて外洋に出た。急にうねりが増し、あちこちで嘔吐する苦しい声が聞こえた。その時初めて、フサノは自分が間違ひなくブラジルという見知らぬ土地に連れて行かれるのだと実感した。

イギリスのデビッド・ウィリアム・ヘンダーソン社で建造された若狭丸は、一八九七（明治三十）年に就航した。総トン数六千三百八十八トン。全長百三十五メートル、船幅十五メートル。当時としては大型の貨客船で、定員は一等二十六人、二等二十人、三等百九十二人の合計二百三十八人。貨物を一千二百十九トン積載できた。最大出力五千百四十四馬力の石炭ボイラーで二軸のスクリュウを回し、最大速力十五・四ノット、巡航速力は十一・九ノット。時速八ノットで一萬四千二百四十五キロメートルを石炭の補給なしで航行可能とされていた。ブラジルまで二万二千キロメートルだから、シンガポールやケープタウンで石炭を補給すれば問題なくブラジルのサントスにたどり着くことができる。船体中央に屹立する巨大な一本煙突から黒煙を吐き、煤を撒き散らしながら、フサノたちを乗せた若狭丸は、ゆっくりとした経済速力で南米大陸を目指した。

本人たちはまったく知らなかったし、生涯出会ったこともなかったが、このときフサノには叔父夫婦以外に同行者がいた。青森県からやってきた十一歳の半田知雄である。本籍は栃木県となつてい

た。半田は最初の二年あまりをフアゼンダで過ごしたあと、フサノと同じようにサンパウロに出て邦字紙で働くことになる。邦字紙とは在留日本人向けの日本語の新聞である。その後、半田は美術学校を出て画家として成功を収め、一九九六年に九十歳の生涯を閉じるまでブラジル日系人を代表する人物となった。緻密な頭腦の持ち主の半田は多数の著作を残しており、そのうち『移民の生活の歴史』と画文集『ブラジル移民の生活』はブラジル移民研究のバイブルとなった。ブラジル時代のフサノの記憶を確認するうえで欠かせない人物である。若狭丸での船旅とブラジルでのフサノの生活は、おおむね半田の著作にあるように流れていく。

若狭丸には一千二百人あまりの移民が詰め込まれており、男二人に女一人の割合だった。移民たちは三等船客以下の扱いで、貨物を積載するための船倉を二階建てに改造して居住区画としていた。身をかがめて歩かなければ鉄の梁はりに頭をぶつけるほど天井が低かった。一族当たり三畳ほどの狭い空間で手荷物の中に身を横たえ、隣との目隠しには毛布などをぶら下げていた。風呂も便所も台所も甲板にしつらえてあり、寄港や入港の一週間前になると、その違法な設備が検査官の目に触れないよう居住区画に戻した。ブラジルで落ち着いた頃、移民船の状態をポルトガル語でカルガ・ウマーナ、人間貨物と呼んでいることを知り、フサノたちは妙に納得させられた。

薄暗い居住区画では、日本各地からやってきた移民たちがお国訛りをがなり立てていたが、親身になってフサノの面倒を見てくれたのは沖繩の人々だった。その心優しさ、温かさが忘れられなかったのだらう。フサノは終生、「沖繩の人たちは心が綺麗だから」と褒めそやしていた。

移民たちにとって、食事は楽しみにするような代物ではなかった。吹きさらしの甲板の仮設の調理場の前に並び、家族ごとの食事当番が「熊本県人本村末廣」など家長の名が墨で書かれた木札を示す。主食と副食類は大きな方のブリキ製のバケツに入れて渡される。下半分に盛り付けられた米飯は、食欲を減退させるような海のおいが染みついていた。その上の仕切り板に副食類が乗せられる。おかずといっても、十年一日の如く代わり映えのしない煮しめがほとんどで、ジャガイモ、人參、牛肉らしき肉片が入っていた。それに沢庵。味噌汁は小さな方のバケツに入れ、船倉の自分たちの居住区画まで運んだ。食器洗いは女たちの仕事で、これもまた甲板での作業だった。

## シンガポール

五月二日、フサノはシンガポールの手前で満十四歳の誕生日を迎えた。日本では庶民が誕生日を祝う習慣などない頃のこと、叔父たちもフサノの誕生日など気に掛けてもいない様子だった。フサノは一人、今日、自分がこの世に生を受けたのだ、それも異国の地で誕生の日を迎えたのは定められた運命かも知れないと、この日のことを忘れないように心に刻んだ。

若狭丸の前部と後部の甲板には天幕が張られ、蒸し暑い船内から逃れてきた移民たちが身体を休めていた。五、六人が一度に入れる水風呂も前部甲板に設けられ、男も女も神戸出港から初めて身体の垢を流すことができた。

シンガポールの港内にはユニオンジャックをはためかせたイギリスの軍艦が何隻も停泊していた。その威光を背に、威張りくさったイギリス人の検疫官が乗り込んで来て、甲板に移民を二列横隊に

並ばせて点呼を行った。埠頭では中国人の苦力クワリーが長い列をつくり、籠に入れた石炭を船に担ぎ込んでいた。水はポンプを使い、布製の太いホースで船内のタンクに注ぎ込まれた。

上陸を許されたのは一等と二等の船客と船長らに限られ、移民たちは沖泊まりした若狭丸の甲板で押し合いへし合いしながら、久しぶりの陸地、それも南国らしい白い建物が並ぶ大都会の景色をただ眺めるだけだった。出港した神戸は日本でも横浜と並ぶ異国情緒を漂わせた街だったが、そんなものが田舎じみて見えるほど、一八二四年に大英帝国が開いた海峡植民地シンガポールは優雅で、異国そのものだった。

一等船客らを送迎している小型ボートに乗れば、数分で異国の地に立つことができる。いまの自分には望むべくもないことだったが、フサノの胸は少女なりの夢で膨らんだ。ブラジルに行つて、そこから羽根を広げて色んな世界を見て歩くのだ。

甲板から下に目をやると、熱帯の果物を山盛りに乗せた物売りの船が横付けし、移民たちを見上げて声を張り上げていた。初めて見るマンゴー、パイナップル、ドリアン……。甘つたるい果物の香りと一緒に、初めて嗅ぐ、臭いけれども食欲をそそる匂いも甲板に上がってきた。フサノはまだ、それが中華文化圏にはつきものの香辛料八角の放つ臭気だとは知らなかった。

シンガポールに二泊した後、若狭丸はマラッカ海峡を抜け、インド洋に入るとすぐに赤道に近づき、さらに南下を続けた。

シンガポール出港から四日目、「北緯零度を通過」と船内のスピーカーが赤道通過の日時を厳おそかな口調で告げ、一等船客には船長から赤道通過の証明書が手渡された。海神ネプチューンが間違

なく赤道を通過したと太鼓判を押してくれた通行手形である。移民たちには証明書の代わりに一人一袋ずつ菓子配られた。三等船客用の売店で売っている森永のミルクキャラメル、大阪の栗おこし、神戸の瓦センベイが、この日ばかりは無料で提供された。フサノは生まれて初めてミルクキャラメルを口にし、栗おこしは終生、フサノの土産の定番となった。儀式が終わると、甲板に急造された舞台で素人芝居やショーめいた出し物が演じられた。フサノを可愛がってくれる沖縄の家族たちは蛇皮線を奏でた。赤道祭は移民たちの誰にとっても楽しい思い出を残した。

## ケープタウン

三週間後、右手にアフリカ大陸が見えた。次の寄港地はアフリカ大陸南端の大都市ケープタウンだった。インド洋の大海原を渡りきったあとだけに、移民たちは上陸して足の裏に大地の感触を味わいたい気分だったが、シンガポール同様、上陸は許されず、若狭丸の船上から街の背後に黒くそり立つテーブルマウンテンを仰ぎ見て、それをケープタウンの記憶として脳裏に刻んだ。標高一千八十六メートルの岩山は、山頂部分が三キロメートルにわたって平坦な形で、そこからテーブルの名がつけられた。「あれがクロンボはい」と末廣叔父が熊本弁で言った。フサノはこのとき、生まれて初めて黒人の姿を見た。黒人たちは粗末な衣服を身にまとい黙々と荷役を行っていた。フサノが若狭丸の船上から目にしたケープタウンはイギリスの自治州となっただけだった。最初に入植したオランダ系移民に加え、フランスのユグノーと呼ばれるカルバン派やドイツ系プロテスタントが加わったケープ植民地の住民は、イギリス人の数が増すほどに二級市民の扱いを受け、

自らをアフリカーナと呼ぶようになり、イギリスへの反発を強めた。その対立は二度の戦争に発展し、第二次ボーア戦争に勝利したイギリスは南アフリカ全土を手中に収めたのだった。

それにしても、とフサノは思った。つい先頃、素晴らしいと思ったシンガポールが田舎町に思えるくらいに、ケープタウンは活気に満ちていた。昼のように明るい電灯が港を照らし、建ち並んだ工場の煙突からは煙が立ち上り、機械の音が鳴り響いている。フサノは、ここもまたイギリスが支配する土地だと教えられ、大英帝国の版図の広さを記憶することになった。

ケープタウンで二泊して港外に出るとすぐ、立つて歩けないほどの大しげに見舞われ、船室の柵からは食器が転げ落ちた。六千トン級の若狭丸でさえ上下左右に大揺れした。大西洋の大しげはインド洋や東シナ海とは比べものにならない荒々しさだった。船客の大半が船酔いで立つこともできず、寢床の周りにへドを吐き散らす者も少なくなかった。しかし、十四歳のフサノは酔うこともなく、波が洗う甲板を走り回るのが楽しくて仕方なかった。参っている大人たち横目に、優越感すら覚えていた。

大西洋でフサノは船上の葬儀というものを目にし、人は死ぬと土に帰ると教えられてきたが、海の上では違うのだと知った。どこの誰かわからなかったが、死者は木製の棺に収められ、それを大きな日の丸が覆っていた。船長や家族が手を合わせる前で、棺は船縁から落とされ、大海原に消えていった。それが西欧流の水葬であることを知った。

それでも波が穏やかな日には大海原を疾走する若狭丸の横をイルカの群が泳ぎ、快適とは言えない船旅に安らぎを与えてくれた。生暖かく吹く熱帯の風と潮の香りに包まれ、フサノは甲板でゴロ

寝したこともある。伝わってくるエンジンの振動に身を委ねながら、フサノは満天の星空に輝く南十字星を何度も手で掴もうとした。流れ星が消えないうちに念じると願いが叶うとされるように、つかまえたサザンクロスが幸せをもたらしてくれそうに思えた。

## 鉄の鮫の海

ケープタウンを出て大西洋に入ると、若狭丸の行く手に最後の難関が待ち構えていた。フサノはのちのちまで自分が紙一重のところを助かったことを知らなかったが、若狭丸は人食い鮫がうようよする大海原を小さなゴムボートで漕ぎ渡っているような危うい状態にあった。

第一次世界大戦では、日本は日英同盟に基づいてドイツに宣戦布告したあと、ドイツの植民地だった中国の山東半島や太平洋の南洋諸島を占領した。こうした連合国側の包囲網に対してドイツは一九一五年二月、商船に対するUボートを使った潜水艦戦を実施すると表明した。いったんは中立国の抗議によって中立国の船舶を除外することになったものの、中立国であるアメリカの国民が乗ったイギリス客船ルシタニア号が撃沈され、アメリカ人百二十八人と子供百人を含む一千百九十八人が犠牲になったことで国際世論は沸騰した。ドイツ皇帝ウイルヘルム二世はアメリカ政府と覚書を交換し、中立国の船舶と大型客船を攻撃しないことを約束した。

これに反発したドイツ軍部は、皇帝の約束を無視して攻撃を続けた。ドイツ海軍に攻撃された日本の商船はUボートによる一九一五（大正四）年十一月の八阪丸と一九一八（大正七）年十月の平野丸、仮装巡洋艦の砲撃で拿捕され、爆沈させられた常陸丸がある。いずれも日本郵船の所屬で、八

阪丸は迅速な退避が功を奏し、常陸丸も拿捕後の爆沈ということで死傷者を出さなかったが、わずか七分間で沈んだ平野丸では乗客八十六人、乗員百二十四人の合計二百十人が犠牲となった。

波を蹴立てて進む若狭丸の船縁では、移民たちが並走するイルカの群に心を奪われていたが、船員たちは東シナ海やインド洋を航行しているときと違い、緊張した面持ちで動き回っていた。フサノの耳にも「セ・ン・ス・イ・カ・ン」という言葉が聞こえた。聞いてみると、海の中に潜っている大きな鉄の船で、ドイツという国がそれを使って若狭丸を沈めに来るかも知れないというのだ。フサノは潜水艦という軍艦はもとより、ドイツという国のことも、その国が日本と戦争していることすら、大人たちの会話を耳に挟んだ程度しか知らなかったが、海の中から大きな得体の知れない怪物が牙をむいて襲いかかってくる光景を想像することはできた。それでも、恐ろしいという気にはならなかった。むしろ、そんなことが起きたら面白いだろうなどと、事あれかしの気分だった。

そんなある日、水平線のかなたに船らしい影が見えた。フサノは船員たちの近くに寄り、聞き耳を立てた。船長が双眼鏡で確認したところでは、水平線のあたりにいる船は日本海軍の軍艦で、若狭丸が信号旗で挨拶を送ったところ、向こうも答礼してきたという。無線を使わなかったのは、どこにいるかわからないドイツの軍艦や潜水艦にこちらの存在を知られないためとのことだった。

若狭丸から見えた日本の軍艦は第一特務艦隊に所属する駆逐艦十一隻のうち、ケープタウンを拠点とする一隻だった。船団の護衛作戦に参加して欲しいとの連合国の要請で派遣され、アジアやオセアニアにあるイギリスやフランスの植民地からヨーロッパに向かう輸送船団の護衛にあたっていた。このとき日本は地中海方面にも第二特務艦隊十八隻を派遣し、Uボートとの三十五回にわたる

戦闘で多くの戦死者を出しながらも、撃沈された艦船から七千人以上の将兵を救助し、連合国から激賞された。凶らずも、若狭丸もまた連合国の商船の一隻として、鉄の鯨が泳ぐ海を自国の軍艦に見守られながら航海していた。

## サントス

サントス港まであと二日という夕刻、右手前方に南米大陸の山々が姿を現した。既に前日、一等と二等の船客たちは宴を開き、別れを惜しんでいたようだった。二万二千キロメートルを踏破した五十八日間の船旅が終わろうとしていた。

入港日が近づくと、移民たちはそわそわと一月半の間に散らかった荷物の整理に取りかかった。大方の者が着物姿からにわか仕立ての洋装に衣装替えした。半田知雄の記憶によると、男は灰色の霜降り模様のかつめ襟服に地下足袋、頭には烏打ち帽を被り、腰に手ぬぐいをぶら下げたりしていた。女たちも看護婦の服を模したワンピースの腰のあたりをベルトで締め、花飾りのついたボンネットのゴム紐をアゴにかけ、初めて履く踵かかとの高い靴のせいでよろめく者も多かった。

フサノも木綿の袷から洋装に着替えた。神戸で末廣叔父が買ってくれた白いブラウスと地味なスカート。よろけないように靴は踵の低いものを選んでいった。デッキに出て外側から船室の窓ガラスに映すと別人のような自分がいた。フサノは髪を両手で押さえつけ、洋装に合うように整えた。

フサノたちの若狭丸は、第一回移民の笠戸丸より五日余分に航海し、ブラジルの赤い大地テラ・ローシヤにたどり着いた。移民たちは接岸までの二日間、沖泊まりで検疫と入国審査を受けた。

到着した六月中旬は、夏を迎える日本とは正反対にブラジルは冬に入る時期だった。六月から十一月は乾期で、コーヒー豆の収穫が最盛期にさしかかる頃でもある。フサノたちは到着早々、フアゼンダと呼ばれるコーヒー農園で農作業に投入されることになっていった。

サントス港にさしかかったとき、目に入ったのは樹木に覆われた低い山々が連なる寂しげな風景だった。それから何キロメートルか河口を遡ると、左手に色鮮やかなサントスの街並みが広がっていた。赤い瓦屋根の下は青、黄、緑といった原色の壁。それが、フサノたちが目にしたブラジルだった。

笠戸丸以来、日本移民が第十四埠頭に第一歩を記してきたサントス港は一五四三年に建設され、約八十キロメートル離れたサンパウロの外港として栄えてきた。フサノたちが着いた頃はコーヒーの取引市場が経済活動の中心だった。

午前三時半に起こされ、七時半頃上陸すると、埠頭のすぐ脇の引き込み線に移民を運ぶための列車が待機していた。フサノたちは荷物をまとめ、家族単位で乗り込んだ。布団をむきだしのまま縄でくくって担いでいる家族も少なくない。ギョツとさせられたのは、外側から大きな錠前がかかれ、ガチャンという音が響いたときだ。囚人や奴隷を運ぶ感覚なのだろう。逃げるに逃げられない気分させられた。木箱をつないだような移民専用列車はガクンと大きく揺れて発車した。車内は固い木製のベンチで、日本では見たことのない巨大な蒸気機関車に引つ張られていた。

サントス港を出ると、蒸気機関車は湿地帯やバナナ畑を抜けたあと、巨体を震わせながら急勾配をゆつくりと登り、クバトンという駅で停車した。そこで列車は六両ずつに分けられ、アプト式牽

引線につながれ、ケーブルに引かれてノロノロと登りはじめた。標高八百メートルのサンパウロに行くには、そうして海岸山脈を越える必要があった。山頂の駅で列車は再び十二両に戻され、サンパウロに向かった。右手の丘に建つ宮殿はブラジルがポルトガルに対して独立宣言を発した場所だと通訳が言った。サンパウロまで、あと八十キロメートルもない。

## 第2章 ノコギリ山のファゼンダ

### サンパウロ移民収容所

サンパウロ州立移民収容所はサンパウロ市の入り口に位置していた。サントス港からの移民専用列車がそのまま乗り入れる設計だった。頑丈な鉄製の門と高い赤煉瓦の塀に囲まれている。二階建ての収容所は赤煉瓦造りの立派な建物で、一八八八年の奴隷解放により海外から移民を導入する必要が生まれ、そのために建設されたという。

収容所長以下、幹部職員が横一列に並んでフサノたちを出迎えた。割り当てられた部屋の天井は高く、五メートル以上もある。病院にあるような鉄のフレームのベッドが一メートル以上の間隔を空けて整然と並べられ、きちんとたたんだ毛布が二枚置かれていた。

その収容所で、フサノは最初のカルチャーショックに見舞われた。生まれて初めての本格的な水洗便所である。天井近くに取り付けてある水のタンクから、ナスのような形の白い引き手が金鎖でぶら下がっている。それを引くと水が勢いよく流れた。若狭丸の便所も足でペダルを踏んで水を流す方式ではあったが、掃除も行き届いておらず、アンモニアの刺激臭が漂っていた。それとは違っ

て収容所の便所は白い瀬戸物の洋式便器で、見るからに清潔そうではあった。

フサノが育った二見では、どの家も屋外に建坪半畳ほどの掘つ立て小屋があり、そこが便所だった。地面に埋め込んだ大きな甕で糞尿を受け、それがいっぱいになると肥柄杓で汲み出し、肥料として畑に撒いた。そんなフサノから見ると、収容所の便所は別世界のようだった。

しかし、それでもフサノは便座に腰掛けるのに抵抗があった。馬蹄形の便座に腰掛けるのだと教えられたが、他人の尻が接していたと思うと、どうにも気色が悪い。便座の上しやがみ、用を足す者があとを絶たなかった。排泄物を流し忘れる者も多かった。

フサノたちが自分の寝台に身の回りの品を置き、一息ついたと思う間もなく、カランカランと鐘が鳴った。食事の合図だった。食堂には長さ一・五メートル、幅六十センチメートルほどの細長い食卓がずらつと並び、配られたカードと引き替えに食事を受け取るようになっていた。

皿に盛られていたのは油でいためた米粥だった。中には親指大の干し鱈が二、三切れと丸く切つて煮込んだジャガイモが入っていた。到底口に合うものではなく、若狭丸の潮が匂う米飯ですら懐かしいほどだった。食事が終わつて間もなく、また鐘が鳴った。食堂に集まるとパンと飲み物が出た。苦くてとても飲めそうにない真つ黒な液体、それが初めて口にしたコーヒーだった。

移民たちは、配置されるファゼンダによって八日から九日間、収容所に滞在することになった。その間、朝食は牛乳なしの苦いコーヒーと薄っぺらなパン、昼と夜は、牛肉スープの中に米を炊き込んだカンジアという米粥に干し鱈、それにイタリア風だというパン。同じ献立が続いた。

収容所に着いた翌日から、移民たちは一人ずつ係官の前に呼ばれ、職業、家族の血縁関係を聞か

れた。職業は農業だと答えるよう、通訳から前もって指示があった。

フサノたちは、収容所の職員のいたすらにも困らせられた。移民たちは職員が教えるポルトガル語を生真面目にカタカナでノートに書き付けては、一日も早く言葉を覚えようと必死だった。しかし、職員たちはそんなことにはお構いなしに、鼻や口を指さしては性器や性行為を意味する言葉を教え、それを若い娘が真面目な顔で口にするのを喝采して喜んでいた。

そんな収容所生活も終わりを告げ、それぞれのファゼンダに向けて出発する日が来た。フサノたちは誰が言うともなく部屋の中を綺麗に掃除した。数カ月後、サンパウロの新聞に日本移民を誉める記事が載ったと教えられた。日本移民が去ったあと、収容所内には煙草の吸い殻や唾を吐いた跡もなかったと感嘆する言葉が連ねられていた。日本移民は整然と秩序だった行動をし、男女とも服装は清潔で、身体も小柄ながら頑健とも書かれていた。それを聞いて、フサノも日本人であることを誇らしく思った。

### ファゼンダ・ダ・セーハ

サンパウロのブラジル日本移民史料館に残る『組合第一回移民原簿 若狭丸 大正六年四月二十日 神戸発 大正六年六月十五日サントス着』によれば、フサノたちが送り込まれたのはサンパウロから北東に鉄道で四百キロメートルあまり、さらに別の鉄道で東に八十キロメートルほど入ったファゼンダ・ダ・セーハだった。標高一千メートルあまりの高地にある。福岡県七家族、福島県と熊本県各三家族の十三家族からなる総勢五十四人。男二十六人、女二十二人に子供六人が含まれていた。

サンパウロから一日二本しかないモジアナ鉄道幹線の列車に乗り、終着駅のリベイラン・プレトまで十二時間以上かかった。サンパウロを出たのが午後七時頃、リベイラン・プレトの一駅手前のサンタテレサ駅には朝の六時半過ぎに到着した。なぜか終着駅のリベイラン・プレトまでの直行列車はなく、そこで次の列車を待つてリベイラン・プレトに行き、リオグランデ線に乗り換えた。収容所を出るとき、強いニンニクの香りがする黒くて長いソーセージを渡された。フサノたちはとんと空腹になるまで待つて、その得体の知れない代物にかぶりつき、目をつぶつて飲み下した。

リベイラン・プレトは地域の中心地で、そこからリオグランデ線のフランカ駅までの八十キロメートルは三等車の固い木製座席に揺られていった。鉄道は地方都市フランカを通つて隣のミナスジェライス州に延びている。フランカ駅にはフアゼンダ・ダ・セーハの牛車が待つていて、フアゼンダまでの十四キロメートルは牛車の荷台に荷物を乗せ、フサノたちはそのあとを歩くことになった。山道は牛車がすれ違えないほど狭く、片側は谷で、牛車も移民たちもノロノロとしか進めなかった。フアゼンダにたどり着いたのは夜の帷とばりが降りてからだつた。

同じとき、若狭丸でブラジル入りした半田知雄はサンパウロの西三百キロメートルほどに位置するフアゼンダ・サント・アントニオに送り込まれた。こちらも標高一千メートルほどの高地にある列車から降り立ったソロカバナ線ポルト・マルチンス駅には駅名表示はなく、144という番号札こそ立っていたものの、線路脇に貨車が一两停車しているだけだつた。目的地のフアゼンダは、そこから三十キロメートルほど東に進んだチエテ河畔にある。半田一家の四人は、駅から原生林の間を縫つて三十キロメートル歩き、道を間違えて十キロメートル戻り、さらに二十キロメートル歩い

てファゼンダにたどり着いた。半田の父は信玄袋を担ぎ、母は風呂敷包みを抱え、叔母はカバンをぶら下げていた。本村末廣夫婦とフサノたち十三家族も同じようないでたちで、疲労困憊していたが、牛車が荷物を運んでくれるだけマシだった。

ファゼンダ・ダ・セーハの中心部には事務所などが入った本部の建物があり、その周りに方形に煉瓦を敷き詰めたコーヒー乾燥場が広がっていた。本部のことをセーデと呼ぶのだと通訳が教えてくれた。フサノたちはコーヒー乾燥場の煉瓦の上に並べられた食事を摂るよう促された。生煮えで芯が残った粒の長い外地米をニンニクと油でいためたのである。塩味をつけたインゲンのような豆の煮物には脂と毛が残ったままの分厚い豚の皮が入っていた。むせ返るような獣の匂いが鼻をついたが、空腹には勝てず、フサノは汁一滴も残さず平らげた。数日もしないうちに、移民たちは豆がフェイジョンというブラジル人の常食で、毛がついた豚の皮が好まれることを知った。

フサノたちがあてがわれた棟割り長屋風の移民小屋は、開かれて百年以上が経った歴史のある農園だけあって、外見だけは赤瓦に白い漆喰壁だったが、家具はなく、寝具は土間に敷かれた枯れ草だけ。枯れ草の匂いは刈り入れた後の稲藁を思い出させた。フサノは夢も見ずに熟睡した。

翌朝、本部で鳴らす鐘の音で目を覚ますと、あたりは暗かった。フサノは末廣叔父に教えられた通り、近くのコーヒーの木の陰に入っしてしゃがみ、用を足した。あちこちの小屋から出てきた移民の男女が、同じようにしゃがんでいる姿が影絵のように見えた。

移民の小屋には便所などない。用を足すのはマンゲイロンという共同飼育場の中だ。あとは放し飼いの鶏や豚が始末してくれる。最初のうちは、夜になるとその糞尿まみれの鶏や豚を家に入れ、

一緒に暮らしていた。農作業に出るようになる、肛門をなめようと突進してくる豚を追い払うため、棒を持ってコーヒーの木陰で用を足し、鍬で穴を掘って埋めることを覚えた。後始末をした指は地面にこすりつけ、昼休みにファゼンダの中を流れる小川まで行って洗い流す。こんな原始的な暮らしは、後始末用のぼろ切れを用意し、洗っては取り替える知恵がつくまで続いた。

最初の朝日が昇ると、移民たちは灰色の岩山がコーヒーの樹海を突き破ってそそり立つ光景にギョツとさせられた。いくつものギザギザに尖った頂がノコギリの刃を思わせた。通訳がセーハとはノコギリのことで、それがファゼンダの名前の由来だと教えてくれた。

ノコギリ山を取り巻くファゼンダは、絵の具をたっぷり塗りつけた原色のキャンパスのようだった。臙脂えんじに近いテラ・ローシャと呼ばれる赤土の上に、碁盤の目に整然と植えられた濃緑色のコーヒーの樹海。目をこらすと赤く熟したコーヒー豆が鈴なりになっている。ローシャとはポルトガル語で紫色のことだ。玄武岩と輝緑岩が風化してできたテラ・ローシャはコーヒー栽培に適した肥沃な土壌だが、粒子が細かく、雨に濡れると泥濘ぬかるみに、晴れた日には土埃になる。ファゼンダの中を歩き交う牛車や馬車は下半分が赤く染まっていた。

ファゼンダ・ダ・セーハは十八世紀後半、ポルトガル発祥の地であるブラガ地方ギマラインスから移住してきたマヌエル・リペイロ・デ・ギマラインスの一家によって開かれた。移住二世としてブラジルで一七八二年に生まれ、百三歳まで生きたジョアキーナ・クストジア・ダ・コンセイソンの年代記によると、ジョアキーナのあだ名はマドリーニャ・ダ・セーハといい、父親のマヌエルはファゼンダの中にそそり立つノコギリ山を見て、愛娘のあだ名にしたのだった。マドリーニャには

ゴッドマザーなどの意味がある。ノコギリ山の女主人、とでもなるうか。子孫たちがまとめた年代記のタイトルはそのものずばり『マドリリーニヤ・ダ・セーハ一七八二―一八八五』となっている。

ギマラインス家はファゼンダ・ダ・セーハのほか、マカウーバス農場、ファゼンダ・ダ・プラタを所有しており、一番南に位置するファゼンダ・ダ・プラタから北端のファゼンダ・ダ・セーハまでは直線距離で四十キロメートル。山道をたどると六十キロメートル以上になる。その中間にマカウーバス農場があつた。

ファゼンダ・ダ・セーハの面積は、年代記には一千七百アルケールと一千九百七十五アルケールのふた通りの記述があり、それぞれ四十二・五平方キロメートルと四十九・三七五平方キロメートルである。前者だと東京二十三区で六位の江東区、後者なら東京で四位の江戸川区に匹敵する広さだ。

フサノたちが入植したとき、所有者はジョアキン・プルデンチ・コレアの一族に変わっていた。

イギリスで出版された『成功者の物語と伝説―一九一三年の成功者』（NMライブラリー 二十世紀のブラジルの印象）によると、ファゼンダ・ダ・セーハの半分ほど二千五百ヘクタールには二十五万本のコーヒーの木が植えられており、材木加工場、牧場、陸稲（かか）とサトウキビの畑があり、コーヒーは年間三百七十五トンが出荷され、牧場には牛五百頭、豚二百頭、羊百五十頭、馬とラバ五十頭と鶏五百羽が飼育されていた。中心部にコレア家の邸宅、事務所、支配人と監督のための住居、入植者用住宅五十戸があり、総延長十五キロメートルの配管を通して水源から水が供給されていた。

## 移民小屋は家畜と同居

移民たちは普通、入植から四、五日を寝台や家具作り、鶏や豚の飼育場マンゲイロンをこしらえるのに費やす。寝台に載せる敷き布団コルシオンは小麦粉の袋を縫い合わせ、そこに先住者の家からもらってきたトウモロコシの皮を、コーヒー袋にして二、三個分詰め込んで出来上がりだ。

幸いにしてファゼンダ・ダ・セーハは開かれてから百年以上経っており、移民小屋の入り口や窓には木の扉がついていた。ほかのファゼンダのように切り倒した椰子の木を縦に割り、その板を組み立てて小屋作りから始めるようなことはしないですんだ。

それでもフサノたちの小屋も、窓ガラスなどはないから、昼間は扉を開放っておかないと家中は真つ暗だった。夜はカンテラの光で人の顔だけは見分けられるが、回りの板壁は釘にぶら下がっている汚れた仕事着と区別がつかないほど、ぼんやりとしか見えなかった。

風呂もなかった。最初は近くの窪地に丸太を並べ、その近くで二十リットル入りの石油缶に入れた水を沸かし、空き缶で作った柄杓で湯をかぶった。やがて、サトウキビから造る蒸留酒ビンガを入れるキント樽を風呂桶代わりにするようになった。ドラム缶は普及していなかった。石鹸は日本から持っていったものを使い、便所は風呂場のそばに穴を掘り、簡単な囲いで目隠しをした。

ファゼンダの朝は早い。起床は午前四時。シーノという鐘の音でたたき起こされる。朝食代わりのコーヒーを飲み終える六時前、またシーノが鳴って、移民たちはコーヒー園に出かける。

集合場所から先は、農場主ファゼンデイロにコーヒー園の運営を任されている監督が、馬上でプ

ジーナという角笛を吹きながら作業場所に数十人単位で移民たちを誘導していく。奴隷制時代の名残で、手には鞭、腰にはピストル。昼食は本部の鐘と監督のブジーナを合図に午前九時にとる。時計で労働時間を管理する訳ではないから、自然、農作業は日没まで続くことになる。

コーヒーの木は高さ三メートルほど。一畝うねに二十本が植えてあり、家族によって二畝、三畝と受け持つ。コーヒー豆の取り入れは、低い枝のものは立ったり、中腰で、高い枝は三脚のハシゴに登って行う。実をちぎって収穫するから、慣れないうちは掌がマメだらけなる。それでも潰れたマメを布で巻いて作業が続けられた。こぼれたコーヒー豆は、熊手状のレーキでかき集め、ペネーラという篩ふるいで土砂やゴミを取り除く。細かいテラ・ローシャの土埃で、身体全体が赤く染まっていた。

なにしろ、一日二人で働いても一袋五十リットルのコーヒー豆しか収穫できず、それでは一日五百レイスから一ミル・レイスにしかならない。五百レイスだと三十三銭、一ミル・レイスだと六十六銭。三十日間休みなしに働いても十円から二十円ほどだ。実際にはそれほど働ける日がある訳ではないし、生活費もあるから貯まる金は知れている。日本移民は渡航費など四十円の負債を分割払いする義務がある。掌にマメができようと、腰が痛かろうと、移民たちは休む訳にかなかった。

採取したコーヒー豆は一袋六十キログラム。米一俵と同じ重さだった。最初のうち、フサノには持ち上げることもできなかったが、慣れというものは恐ろしい。日が経つにつれてコツを覚え、難なく担げるようになっていた。フサノたちはコーヒー豆を詰めた木綿や麻の袋を担ぎ、馬車まで運んだ。袋には番号が振ってあり、監督が手帳に控え、空袋は持ち主に戻される仕組みだ。

六月末のファゼンダは、標高一千メートルの高地ということもあって、朝はかなり冷え込み、フサノたちはコーヒー袋をシヨールのようにして肩を覆い、農作業に出かけた。七月になると川の近くでは朝靄あさしやで全身がびしょ濡れになり、たき火で衣類を乾かしながら、それでも作業の手を休めることはなかった。乾期が終わる十一月頃から雨の日が多くなり、コーヒーの木々も青々としてくる。あまり知られていないことだが、コーヒーは純白の花を咲かせる。八月末頃から十月にかけて三回ほど咲き、最も花が多い二回目にはファゼンダ全体を可憐な花が埋め尽くす。花が月下美人のように二、三日で薄命な生涯を終えると、コーヒーチェリーと呼ばれるコーヒー豆が実る。

### パトロン一家の視察

ファゼンダに活気が出るのは、収穫期と契約更新期である。

収穫期に入ると、ファゼンダで一番大事な行事が待っている。所有者であるパトロンが家族連れでサンパウロから見回りにやってくるのだ。支配人と監督の顔は緊張で引きつり、本部に隣接した邸宅の内外は黒人の家政婦の手で磨き上げられる。パトロン一家は十四キロメートル離れたフランカの駅から迎えの専用馬車で乗り込んでくる。邸宅に招じ入れられるのは経営状態を報告する支配人のみ。移民たちを差配している監督でさえ入れないほど、厳格な身分制度が貫かれていた。

パトロン一家はファゼンダ内を馬に乗って視察する道すがら、移民たちに声を掛けることもあった。ツバの広いテンガロンハットをかぶり、脛すねの部分すねを皮のゲートルで包み、腰には大型の拳銃をぶら下げている。後日、フサノはアメリカの西部劇を観て、パトロンの恰好が映画に登場する騎兵

隊の将校たちとそっくりなのに気づいた。

契約更新期は九月末から十一月初め頃で、サンパウロ州は春である。移民たちの居住区域コロニアは、出入りする牛車や馬車のギシギシという音で満たされ、ごった返す。よそのファゼンダへの移転はムダンサといい、家族の多い家では六頭立ての牛車に家財道具を積み上げて出ていった。

コーヒーの収穫が終わると、間作としてフェイジョンと呼ばれるインゲン豆が栽培される。ブラジル人の主食フェイジョンは、豆をとったあと、鞘や茎なども畑の肥料として適している。間作といっても、当時のブラジルの農業は鋤で畑を起こしたり、肥料をやることはなかった。原生林を開墾すれば数年は腐葉土が農作物を育ててくれる。柄の長いナタ鎌エンシャーダで除草し、フェイジョンの鞘や茎と枯れ草を肥料にするだけである。藪払いには柄の長い鈍フォイセや、移民たちが日本風にダンピラと呼ぶ刃渡り三十センチメートルほどのファツコンという大型ナイフも使われる。

この間作の期間、移民たちは一人当たり二千本のコーヒーの木を受け持ち、除草などの手入れに明け暮れる。フサノたちもコーヒーの畝の間で毎日を過ごした。

猟銃はどの家にも備えられていた。悪漢やオンサという南米ジャガーから家族を守ると同時に、動物性タンパク源を自給するための必需品でもあった。フサノたちは山豚の肉を口にするが多かった。鹿のぼうが射止めるのは簡単だったが、調味料をふんだんに使ったフランス料理の味付けなど無縁な生活では、山豚のぼうがうまいと感じられたのだ。

移民たちの生活では野宿も普通のことだった。隣のファゼンダまで何十キロも原生林を縫って徒歩で往復するとき、夜は必ず道ばたに陣取って火を焚いた。そうしておけばオンサが近寄ってこな

いし、蚊に刺されることもない。たき火で湯を沸かし、淹れたコーヒーを飲みながら、手持ちの食料を頼張る。そうした野宿の方法をフサノも自然と身につけていた。

女たちは農作業のほかに、炊事、洗濯などいくつもの家事をこなしていた。小川のほとりで洗濯板を使って衣類を洗うのは日本の農村でも見られた光景だったが、ブラジルの女たちは腰まで川に浸かって洗濯するし、石油缶に入れた石けん水で洗濯物を炊き、草の上に拡げて晒してから、それを洗濯板に叩きつけて真っ白にしてしまう。これにはフサノも面食らったが、早く洗濯を済ませることができるとええ綺麗になるので、見習うことになった。

水汲みと薪集めもかなりの重労働だった。ファゼンダのコーヒー乾燥場には大きな水タンクが備えられており、女たちは水の入った二十リットル入りの石油缶を頭に乘せて、自分の小屋との間を何往復もしなければならなかった。男たちが林を切り拓くと、女たちは薪に使えそうな小枝を集め、その束を頭に乘せて運ぶ。農作業の現場に食料を運ぶのも女で、二つの袋を振り分け荷物にし、前の袋には食料、後ろのほうはビンに詰めたコーヒーを入れていた。

日が経つにつれ、移民たちの服装もコロノらしくなっていた。フサノも最初の頃は和手ぬぐいで姉さんかぶりをし、木綿のブラウスと長いスカートを身につけていたが、裸足のままだった。しかし、ブヨに刺されて農作業などできないことを思い知らされ、ズボンにサパトンという分厚い牛革の労働靴姿になった。日本から持参した地下足袋などものの役に立たないのがファゼンダの労働だった。髪の毛は四角い布のレンソを被って整えた。赤いレンソが日本移民の若い娘の目印だった。

男たちは、頭にはソフト帽かパーリヤという椰子の葉で編んだ帽子を載せ、首には手ぬぐいを巻

き、腰にはファツコンをぶら下げていた。

慣れない農作業に追われる毎日だったが、それでもフサノたちはファゼンダの生活に馴染んでいた。ブラジルの習慣通り、道行く人と朝はボンジーア、昼間はボアタールデと普通に挨拶を交わすようになった。おはよう、こんにちは、である。家では日本語で会話していた時代だったが、子供たちは、いつの間にかコーヒーをカフェー、米をアイロスト、ポルトガル語で呼ぶようになっていた。

### 国籍不明の汁かけ飯

食事も変化していった。最初の頃は重労働に耐えられるだけの腹ごしらえが先決だった。脂っこいブラジル式の食事には馴染むことができなかったもので、仕方なく乾し肉や干し鱈とジャガイモ、タマネギを入れ、和食とはほど遠いがブラジル料理でもない国籍不明のスープをこしらえ、それと一緒に粘り気のない外米を頬張り、胃袋に流し込んでいた。

それがやがて、日本式とブラジル式をチャンポンにしたような料理に変わる。パサパサした外米に茹でたフェイジョン豆を載せ、国籍不明のスープをぶっかけるのである。ブラジル庶民の基本的な食材であるマンジョーカというイモの粉も、炭水化物として食卓に顔を出すようになった。

マンジョーカは、その粉を手でつまんだり、スプーンで口に入れ、水で流し込むだけのことも多かった。それだけでも満腹感が得られるからだ。少し手をかけるときは、マンジョーカの粉に細かく割いた乾し肉と油カスなどを加え、油でいためる。フェイジョン豆のほうは、豚の脂とニンニク

と塩で味付けしたものがブラジル人の主食になっていた。若い移民たちは濃厚で腹持ちがよいと歓迎し、フサノも嫌いではなかったが、年配者や女性たちは敬遠ぎみだった。

フェイジョン豆を甘く煮て、汁を多くし、麦粉で作った団子を入れる日本式のおやつや、マモンと呼ばれる青いパイヤ、マンガと呼ぶマンゴーを開いた一夜干しの漬物も食卓に上るようになった。

入植から一年ほどが経ち、少し金銭に余裕が出てくると、移民たちもフェイジョアードを口にするようになった。ブラジル人が世界で一番うまいとさえ言うてのける料理だ。フェイジョン豆、塩漬の豚肉、ペーコン、ソーセージ、牛の乾し肉などをトロトロになるまで煮込む。豚の鼻、耳、皮なども形を残したまま入っていて、美容によいとされるコラーゲン料理の趣がある。

とにかく豚は食生活に欠かせない食材だった。豚を囲いに追い込んで動けなくしておいて、腰から抜いたファツコンを豚の心臓にするすると差し込み、流れ出した血を金だらいやバケツ、鍋で受ける。ギヤーギヤーという断末魔の悲鳴も血が流れるにつれて途絶える。

その豚を解体し、脂を米、豆、野菜の煮物など何にでも加える。ソーセージは豚肉を挽肉にし、塩、ニンニク、こしょうなどを入れて混ぜ、漏斗型をしたブリキ製の機で腸に詰め込む。常食とあって、ソーセージ用の腸はファゼンダの売店で売っていた。豚の脂は石鹼にも化けた。

フェイジョアードの次に人気があったのは、牛の尻尾の料理ラバーダだった。臭みを抜き、骨を外した尻尾の肉をトマト味でトロトロに煮込んである。

ラバータを作るとき、屠<sup>ほふ</sup>られる不運な牛は、豚と同じく頑丈な木枠に押し込まれ、ファツコンが

心臓に差し込まれる。数杯のバケツを満たした血はブラッドソーセージを作るのに使われる。牛の解体の最後にラバーダの主役である尻尾が切り取られ、大きな皿に恭しく横たえられるのだ。

フサノは、さすがに牛や豚を屠る作業をしたことはなかったが、鶏を絞める作業は当たり前になしていた。共同飼育場マンゲイロンの中に放し飼いされ、人間と豚と鶏の糞尿が羽根にこびりつき、異臭を放っている鶏をつかまえ、まず首を一ひねりして息の根を止める。そして丸太の上に首の部分を載せ、ファツコンで一撃のもとに切り落とすのである。

ブラジル生活に馴染むにつれ、一年ほどの間に移民たちの食生活や習慣も変わっていった。日本食のときにも箸は使わず、味噌汁もスプーンで口に運ぶようになった。もちろん朝食はブラジル式にコーヒーだけ。昼食が重視される。土曜の昼食など、フェイジョアーダを腹いっぱい食べ、蒸留酒ピンガをあおり、そしてゆっくりとセスタ、要するに昼寝を楽しむのである。

のんびりしたファゼンダの暮らしだったが、一週間のうち日本移民だけが目立つ日があった。日曜日である。ブラジル人やヨーロッパ系の移民たちは労働着を脱ぎ、それなりに身だしなみを整えて友人・知人の家を訪問し、食卓を囲んで盛り上がる。女たちは裸足のまま歩き回るが、それでもレース飾りのついたブラウスに原色のストライプが入ったスカートでめかし込んでいる。それが日本移民だけは労働着を着たままで、外作地と呼ばれる自由耕作地に出かけ、自分たちの実入りになる作物の手入れに没頭するのだった。この働き蜂ぶりが日本移民の成功の原動力となった。

## スペイン風邪

そんな週末のセスタの夢は忍び寄る魔の手によって打ち破られた。スペイン風邪である。

スペイン風邪は一九一八年から一九九年にかけて世界で大流行したインフルエンザである。

一九一八年三月にアメリカとヨーロッパで始まった第一波、一九一八年の晩秋からの第二波、一九一九年冬の第三波と、大流行が三回にわたって繰り返された。

感染者数は、世界人口の二五%から三〇%とされたり、およそ五億人など諸説がある。致死率は二・五%と推定され、死者数は全世界で四千万人から五千万人、一説には一億人ともいわれる。日本の内務省統計でも感染者は約二千四百万人、死者は約三十九万人。アメリカの死者は五十万人以上にのぼった。スペイン風邪の大流行による多くの死亡者により、徴兵できる成人男性が減ったため、第一次世界大戦の終結が早まったという説もあるほどだ。

スペイン風邪は一九一八年三月、アメリカのカンザス州ハスケルから感染拡大が始まった。ハスケルにはアメリカ第二の規模を誇る陸軍基地キャンプ・ファンストンがあり、兵士五万六千人が駐屯していた。この基地から別の基地や周辺地域に感染が拡大していった。一九一八年の春だけでアメリカの主要軍事基地の三分の二で集団感染が発生し、これがヨーロッパ戦線に投入された将兵によって世界的なパンデミックを引き起こした。

アメリカから始まった感染がなぜ「スペイン風邪」なのか。ヨーロッパが第一波に見舞われた一九一八年初夏、第一次世界大戦の中立国として情報を統制していなかったスペインでの流行だけ

が大々的に報じられ、あたかもスペインから感染が拡大していったかに思い込まれてしまったのだ。スペイン風邪では、フランスの文学者ギヨーム・アポリネール、ドイツの政治学者マックス・ヴェーバー、オーストリアの画家グスタフ・クリムトら世界的な著名人が命を落とした。日本でも劇作家・島村抱月、日露戦争での諜報活動で知られる陸軍大将・明石元二郎あかしもとじろうらが病魔に斃れた。しまむらほうげつ

ブラジルにスペイン風邪を持ち込んだのはイギリス客船デメララの乗客とされ、フサノたちがファゼンダで汗を流していた一九一八年のことである。

上陸したスペイン風邪は各地のファゼンダにも蔓延した。ファゼンダでは、コロノがマラリアで高熱を出したりすると監督が事務所からファルマツセウチコという薬剤師を連れてきてキニーネなどを投薬する。スペイン風邪の時も同じように解熱剤が与えられた。ファゼンダは人口密度が低く、空気も澄んでいることが幸いして、移民から多くの死者を出すことはなかったが、半田知雄は感染して意識がなくなるほどの高熱を出した。フサノも罹かったが、重症化することなく生き延びた。

スペイン風邪ではないが、一年後にフサノたちと同じ航路でサントスに向かっていた移民船・若狭丸では脊髄脳膜炎患者が発生、シンガポール寄港までに六十人が死亡した。すし詰めの状態の移民船での防疫の困難さは容易に想像できる。ひとつ間違えれば、フサノたちもスペイン風邪や脊髄脳膜炎の餌食になっていたかも知れなかった。

それでも、スペイン風邪に斃れることもなく、フサノたちの生活は安定の兆しを見せていった。

国立国会図書館編『ブラジル移民の100年』によると、ファゼンダに入植して三、四年もする

と移民たちの生活は安定した。ソブラード耕地に入植した第一回の笠戸丸の移民たちの場合、着いた直後には一人が一日に九百十レイスしか稼げなかった。日本円で五十四銭である。日本でも地方の人力車の車夫が一日に四十銭から五十銭を稼いでいたから、ブラジルくんだりでの重労働に見合った賃金とは言えない。それが五カ月後には一日六十銭から一円二十銭を手にするようになる。三年後には年収は一千二百ミル・レイス、日本円にして八百四十円にも増え、うち三百五十円から四百二十円を仕送りできるようになった。高等文官試験合格組の国家公務員の初任給五十五円の半分以上を仕送りできるとあれば、移民は外貨獲得の国策にも適っていた。

生活の安定は、コーヒーの畝の間作地やファゼンダ以外の外作地と呼ばれる土地で米、トウモロコシ、豆、サトウキビ、野菜などを栽培し、家畜を飼い、自分たちの食用以外を売って副収入を得るようになったからである。人によって失敗や程度の差はあるものの、休日にも休まない日本移民の暮らしは軌道に乗っていった。

### 小銃と拳銃を撃つ

二年あまりのファゼンダ暮らしで、フサノは日本で女学校に行つたくらいの学力を身につけていった。最初の半年が過ぎるあたりから、末廣叔父が難しい日本語の読み書きを、日本から送られてくる何か月か遅れの雑誌を教科書代わりに教えてくれた。算術も習った。ほかの家族の子弟も加わり、小屋の外のむしろの上で車座になつて勉強した。ちよつとした寺子屋だった。ポルトガル語は監督の配下のブラジル人たちをつかまえては教わつた。現地の小学校で使っている教科書を持つ

てきてくれたから、難しい言葉はともかく、日常会話と基本的な読み書きもできるようになった。フサノの十四歳の脳みそは、ありとあらゆる知識を海綿のように吸収していった。

口にする日本語も変わった。若狭丸に乗るまで、フサノたちの日本語は熊本弁だけだった。それが全国から集まった移民たちと話すことで、熊本訛りの残る標準語に変わっていた。

日本の女学校に行っても絶対に教わらないことも身につけた。ひとつは家畜の解体法、いまひとつは射撃と乗馬である。

前に述べたように、移民の家には護身用と狩猟用を兼ねて必ず猟銃があったが、末廣は拳銃も手に入れていた。甲種合格で二年間の兵役に行った末廣は、射撃が得意だった。日露戦争で活躍した三十年式歩兵銃を撃つたというのが自慢だった。単発式だった日清戦争当時の村田銃と違い、列国の小銃なみに五発の銃弾を素早く撃つことができた。末廣は猟銃を撃つときは伏射するように言った。フサノには猟銃は重く、狙いが定まらなかつたからだ。暗夜に霜の降る如く、と帝国陸軍式の引き金の落とし方を教えられた。それだとガク引きにならないから地面を撃つこともない。

中古品を安く買ったらしい拳銃は使い込まれ、角が擦れていた。銃把と呼ばれる握り手の部分にはS&Wの文字が刻まれ、レンコンのような形の弾倉には六発の弾丸が込められていた。両手で銃把をしっかり握り、銃身先端の照星の延長線上に目標を捉える。教えられた通り静かに引き金を落としつつもりだったが、フサノは反動で尻餅をついてしまった。末廣叔父が愉快そうに笑った。

フサノは馬とも仲良くなった。ファゼンダには馬車を引くための脚の太い大型と、監督たちが乗っているスマートな馬の二種類がいた。どちらも優しい目が愛おしかった。フサノが乗りたそうに

していると、フアゼンダの使用人たちは快く鞍に押し上げてくれた。こんな時、子供は得だ。やがてフサノはフアゼンダの中を馬で駆け回るようになった。ちゃんと仕事をしていたので、監督や末廣叔父に叱られることはなかった。

叔父夫婦との二年間は、農作業や家畜の世話、炊事、洗濯などに追われる中で想像した以上に早く過ぎていた。

フアゼンダ暮らしの間に、フサノの身体は女らしくなっていた。男たちの視線が服の上から身体をなめ回していく。農作業が終わり、小屋の下の川で身体を洗うときも、物陰からのぞく視線を感じた。フサノに視線を投げたのは男たちばかりではなかった。女らしさを増していくフサノに、叔母のツノは感情を爆発させるようになっていた。夫の末廣と姪のフサノが男女の関係になりはすまいかと、気を揉んでいることがわかった。末廣は意識してフサノを他人行儀に扱うようになった。

娯楽などないフアゼンダでは、構成家族として同居している親類縁者の若い娘に家長が手を出し、妻との間で刃傷沙汰に及ぶことも稀ではなかった。フサノは末廣から手を出されることはなかったが、ツノが自分たちの間柄を疑っているからには、無事に済むとは思えなくなっていた。

### 縁談の相手は四十男

そんなおり、フサノに縁談が持ち上がった。女性が少なかった初期移民の時代、十四、五歳の娘のいる家族には縁談が断り切れないほど持ち込まれた。だから連れ家族に娘がいると、それを使っ

て頼りになる婿を探し、這い上がろうとする家長も少なくなかった。フサノの相手は、なんと四十歳の男だった。笠戸丸の頃の初期移民で、自作農として安定した暮らしをしているらしかった。聞いただけでフサノの全身を悪寒が走り、鳥肌が立った。天が定めた男と出会うまで、この身体をほかの誰にも触らせてなるものか。

とにかく自由に羽ばたきたい。自分の一生をコーヒー栽培で終わらせたくない。外にはもつと美しく輝く世界が広がっていて、自分を迎え入れてくれるに違いない。そうフサノは思っていた。まずはサンパウロのルス駅の赤煉瓦造りの立派な建物を目指そう。移民収容所からファゼンダ・ダ・セーハに向かうとき、チラッと目の隅に入った建物だ。その向こうには若狭丸から眺めたシンガポールやケープタウンのような美しい都会が待っているはずだ……。

ある日、射撃の練習をしていると末廣が妙なことを言った。「夜逃げすつときは、これば忘れんごっせんならんたい。ファゼンダを抜け出すときは、忘れないでピストルを持っていくんだぞ」末廣はフサノが四十男との縁組みを嫌がっていること、それに加えて妻のツノがことあるごとにフサノに辛く当たっていることを知っていた。ツノとフサノが刃傷沙汰に及ぶか、フサノが逃げ出すのも時間の問題だと思っていた。フサノは黙って鎮き、実際、言われた通りにした。

フサノは貧しい暮らしから抜け出したい末廣叔父の気持ちを理解できない訳ではなかった。だが、人生は一度しかない。外の世界に出て夢を叶えるためにも、いまが縁の切り時だと思い、深夜、暗闇に紛れて小屋をあとにした。射撃練習の時に叔父が呟いた通り、ピストルを持ち出すことを忘れなかった。のちに、心を病んだツノが鉄道自殺したと父の三次から知らされた。

そんなことだったから、フアゼンダにも淡い恋心にも未練おくとはなかった。晩生おくとだったフサノは二年あまりの間に娘心を掻き立てられたことは一度しかなかった。ほんの何回か見かけただけのパトロンの息子である。サンパウロの広大な邸宅で暮らしていると聞いた同い年くらいの白人の少年。馬に乗り、父親のあとを追いながらフサノのほうに目をやり、互いの視線が絡み合ったことがある。ただそれだけだった。追つ手を気にしながら叔父夫婦の小屋を振り返ったとき、フサノのまぶたに少年の面影がかすかに浮かんだが、ほんの少し甘酸っぱい柑橘類のような香りを感じただけで、行く手の闇に目をこらすうちに忘れてしまった。

### 線路伝いに八十キロメートル

フランカの街はフアゼンダ・ダ・セーハの西四十四キロメートルにあり、フアゼンダからの道のひとつは街の南側でリオグランデ鉄道の線路にぶつかる。フサノはそのルートを選んだ。

一番人目につかないのは、六十キロメートルほどの山道をたどり、コレア家が所有する三つのフアゼンダの中を抜けてエスタシオ・サランデイ駅の近くに出るルートだったが、昼は森の中で眠り、夜歩く身には危険が大きかった。その点、サンパウロ州の東隣ミナスジェライス州に伸びるリオグランデ線は、労働者とコーヒーを運ぶことだけを目的にしたような路線だから列車の本数も少ない。用心すれば人目を避けられるだろう。フランカからリベイラン・プレトまで八十キロメートル以上あるが、線路の枕木の上をびよんびよんと歩くのは、フアゼンダ育ちの身には造作もないことだった。フサノは衣類などを詰め込んだトランクを片手に提げ、飲み水とコーヒーの入ったビンと乾し肉

などを入れた風呂敷包みを前に、身の回りの品が入った信玄袋を後ろに振り分け荷物にしていた。二年あまりの間に背丈も百五十四センチメートルに伸び、六十キログラムの重いコーヒー袋を担いできたことで筋肉も鍛えられていた。荷物を重たいとは感じなかった。

標高一千メートルの一带は夜になると気温が下がったが、必死で歩くフサノのほてった身体には冷気が心地よかった。気をつけなければならぬのはオンサという南米ジャガー、そして女を人間とは思っていないような荒くれ男たちだった。汗臭い男に襲われ、組み敷かれるのはまっぴらご免だ。オンサのぼうがマシだ。もし襲われたら、これで相手するしかない。フサノは、ベルトに挟んだ拳銃と鋭い刃のファツカの束をさすった。鋭利な刃を持つファツコンより小ぶりのナイフだ。拳銃は末廣叔父の言葉通りに失敬したものが、何回も射撃練習をしていたから暴漢やオンサを躊躇なく仕留める自信があった。

とにかく、リベイラン・プレトの街まで、近くのファゼンダの娘のふりをして何食わぬ顔で歩き、サンパウロ行き列車に乗るのだ。

ブラジルよいとこと誰が言うた

移民会社にだまされて

地球の裏側へきてみれば

聞いた極楽、見て地獄

線路の枕木の上を飛び跳ねながら進むフサノは、いつしか移民たちが宴会で憂き晴らしに歌っていた流行歌の替え歌を口ずさんでいた。移民たちの宴会は、小屋の前の空き地にコーヒー採取用のパンノという布を敷き、男たちは焼いた干し鱈をかじりながら強いビンガを呷る。女はフェイジョンの煮豆、ふかしたトウモロコシの粉の団子、甘ったるいコーヒー……。そんな光景ともお別れだ。

サンパウロへの本線が通るリベイラン・プレトの駅は、ブラジルで十本の指に入る地方都市の玄関口らしく、塔を備えた赤煉瓦造りの二階建て。風格のある建物だった。フサノは駅に到着くように計算して歩き、何食わぬ顔でサンパウロまでの切符を買った。フアゼンダで監督の配下たちから仕入れた話では、リベイラン・プレトからサンパウロ行きの直行列車はなく、次のサンタテレサから一日二本直行列車が出ていた。十二時間かかるという。一本は夜行列車だった。女の一人旅には夜行は避けたほうが無難だ。寝込んだところを襲われたら、金ばかりか命までも失うかも知れない。

フアゼンダでの二年あまり、末廣は日本へ仕送りした残りをフサノにも分け与えていたから、汽車賃や安ホテルに泊まるくらいのは金は貯まっていた。フアゼンダで聞いた話だと、リベイラン・プレトの街で家政婦をすれば月に二十ミル・レイス、日本円にして十三円ほどになり、日本で大工が手にする三十日分の給金と同じだという。しかし、フサノは同じ家政婦をするのならサンパウロで探そうと思った。自分一人が食っていきけるだけの仕事は見つかるだろう。

リベイラン・プレト駅の内に入る前、フサノは物陰に入り、神戸で買ったブラウスとスカートの着替え、靴も履き替えた。フアゼンダでほとんど身につける機会がなかったスカートは、フサノの背が伸びた分、丈が短くなっていた。神戸で買ってもらったとき、大人用しかなかったので腰回

りをベルトで締め付けてすり落ちないようにしていたのが、いまではびったりだった。

問題はブラウスだった。何とか着ることはできたが、成長した胸が突っ張って乳首の形がくつきりで見えてしまう。神戸の店で売っていた乳あてを思い出したが、そんなものはない。フサノはしばし考えたあと、風呂敷包みから晒しの布を取り出して乳房の上から巻き付け、ブラウスのボタンを留めた。晒しは末廣叔父の越中褌で、軍隊では怪我をしたときに包帯替わりするのだと教えられ失敬してきた。これで何とか、男どものいやらしい視線を引きつけないですみそうだ。

頭の赤いレンソも外した。いかにもファゼンダから逃げ出してきたように見えては怪しまれる。トランクの底にしのはせた拳銃まで見つけられるかも知れない。毎日履いていた踵のすり減ったサパトンを脱ぎ捨てるとき、離れがたい感傷を覚えた。

列車が走り出してしばらくして、フサノは自分が追っ手を気にしなくてもよい身分なのに気づき、頭を掻いた。二年間の契約期間が終わり、自由の身となったいまは、どこに行こうと追っ手がかかることはなかったのだ。始発のサンタテレサからサンパウロまで駅は五十二。各駅停車の直行列車が二つ目のブエノポリス駅に差しかかったあたりでフサノは眠りに落ちた。

## 移民は棄民

フサノがファゼンダ・ダ・セーハを出奔したあと、叔父の本村末廣は堅実な移民人生を送った。

これから述べていくように、フサノがサンパウロの邦字紙で働き、上海でカレッジに学び、アメリカのキャリア外交官と激しい恋をし、上海で暮らしていた頃、本村末廣は一九三三年一月二十七

日付の邦字紙『聖州新報』に顔を出す。

帰国者のために七ミル・レイスを寄付したというもので、居住地はサンパウロの北西、ノロエステ線アラサツバ駅コレゴナセツセンテ植民地。サンパウロから五百キロメートル離れた奥地である。入植した頃の一ミル・レイスは六十三銭。七ミル・レイスなら日雇いの七日分の日当にあたる。一九三三年であつても、それなりの寄付であつたらう。末廣たちがブラジルに到着してから十六年。貯めた金で土地を手に入れて最初の入植地ファゼンダ・ダ・セーハから移住したものと思われる。

日本人の移住が始まった一九〇八年には、既にノロエステ線がアラサツバまで開通していた。隣国パラグアイとの戦争に備えた軍事鉄道だったが、一九二〇年代に入るとサンパウロ州政府は奥地振興策として、沿線の原生林を二十五ヘクタール単位で売り出した。コロノ契約の終わった日本人移住者がいっせいにノロエステ沿線に入植を始め、駅ごとに日本人移住地が出現していった。ゴールドラツシユに沸いたカリフォルニアも、かくやと思われた。末廣の姿もそこにあつた。

同じ年の『伯刺西爾年鑑』の在伯邦人住所録にも、末廣はコレゴナセツセンテ植民地の住所で自作農として記載されている。所有地は三十六ヘクタール、一万二千本のコーヒーの木を所有とある。生活が軌道に乗っている様子がわかる。

五年後の一九三八年五月には、末廣はサンパウロと十八キロメートルしか離れていないサント・アンドレ市の旭植民地で暮らしている。五月二十六日付『聖州新報』は、「植民者の情けで帰る涙の七十爺さん」という見出しで、息子を亡くし、高齢のため生活が立ち行かなくなった男性の帰国費用を末廣たちが集めたと伝えている。それぞれが四百五十ミル・レイスを出し、帰国費用の半額

を寄付したとある。大工の日当の百日分ほどを何人もが出した様子がわかる。

一九四二年、末廣は旭植民地の日本人会で初代会長に就任するが、しばらくして職を辞している。そこで末廣の消息は途絶えた。

それから四十年後の一九八〇年代はじめ、フサノの息子の和久かずひさのもとに熊本で暮らすフサノの末の妹のシノブから連絡があった。末廣の後妻の係累が福岡県内に住んでおり、末廣の遺産については、末廣は二度の結婚でも子孫を残さなかったということだ。姪の息子の和久にまで連絡が来るということは、末廣は二度の結婚でも子孫を残さなかったということだ。シノブの口ぶりでは、末廣はクリーニング業でそれなりの成功を収めたらしい。クリーニング業は移民先の国々で日本人が成功を手にしてきた分野のひとつである。商売が成り立つには一定の人口が必要で、その場所としてサンパウロに隣接するサント・アンドレの街を選んだらしい。

シノブに相続を放棄すると即答した和久は、末廣たちの情報を得たいと外務省の担当部署に電話を入れてみた。電話に出た初老らしい事務官はぞんざいな口調で言った。「そんなこと、ここではわからないよ」。和久の頭の中で「棄民」という言葉が明滅した。

棄民のことを『広辞苑』は「見すてられて国家などの保護下にない人たち」と記している。日本では、政府に奨励されてハワイ、カリフォルニア、中南米諸国に移住していった明治・大正期の人々、満州開拓にかり出され、敗戦後、現地に残された人々などが「棄民」と呼ばれてきた。本人たちは日本国の保護を信じて疑わなかったが、末廣夫婦やフサノたちもまた、地球の裏側の地に放り出され、見棄てられた存在だったのである。

### 第3章 青春のサンパウロ

#### 十三人の聖職者の村

列車がサントス・ジュンジャイー鉄道のスルズ駅に滑り込むと、フサノはまるで行き先が決まっている乗客であるかのように、脇目も振らずに駅の正面玄関から外に出て、少し行ってから振り返った。最初の目標にしようと心に決めていた駅舎があった。赤煉瓦造りの四階建て。尖塔が時計台になつてゐるヨーロッパ風の威厳のある建物だった。フサノはかねての計画通りサンパウロにたどり着いたことを確かめ、安堵の息を吐いた。

駅前広場から眺めるサンパウロは、どこを見てもヨーロッパそのものように思われた。駅前には一頭立てや二頭立ての馬車が客待ちしている。煙を吐かない列車のような乗り物が大通りを走ってくる。中には椅子が並んでいて、客が飛び乗ったり、飛び降りたりしている。行き交う人々にフアゼンダのような薄汚れた労働着姿はない。男は高いカラーをつけたチョッキ姿、女は長袖のブラウスに裾を引きずるようなロングスカートを身につけている。

スルズ駅の北側には一九〇五年に建てられたという立派な美術館と公園もあった。フサノはまだ知

らなかつたが、サンパウロにポルトガル人が自国の民と文化を植えつけて四百年近くになるうとしていた。西暦一五〇〇年にブラジルをpushさえたポルトガルは、一五五四年に海岸部から十三人のイエズス会の神父と修道士を送り込み、インディオから襲撃されにくい丘の上に聖パウロを守護神とする村を作った。聖パウロ、つまりサンパウロの始まりである。

そのとき、駅舎に見とれていたフサノは不意を衝かれた。石畳の上に置いていたトランクをひたかれたのだ。フサノの前を、トランクを肩に担いだ少年が足早に歩いて行く。十歳くらいだろうか。斜め後ろから見えた可愛らしい顔立ちは、明らかに何代にもわたる混血、それもポルトガル人、先住民インディオ、それにアフリカから渡ってきた黒人奴隷の血が入っていると思われた。

エスペリ！ 待って！ とポルトガル語で叫びながらようやく追いつくと、そこはルス駅から大通りを隔てて南側の小さなホテルの玄関だった。ルス駅の真向かいには石造りで三階建ての立派なホテルが建ち並んでいる。真ん中のホテルの名はレベッキノーと読めた。フサノが連れて行かれたのは、そうした一流どころから少し外れた家族経営と思われる小さなホテルだった。

少年はトランクを置き、フサノを見上げてにっこり笑った。思った通り黒目がちの愛らしい顔立ちだった。ホテルの客引きをして駄賃をもらっているらしい。フサノも、してもらったことにチップを渡す西洋流は、見よう見まねで知っていたから、財布から小銭を出して渡した。チップをやったことで、なんだか大人になったような気がした。少年が連れて行ったホテルは、フロントに陣取っている主人も、その細君らしい太った中年女も、人の良さそうな笑みを浮かべており、曖昧宿と呼ばれるような、おかしなホテルでないことがわかった。

通された部屋は狭く、隣の建物の煉瓦壁が窓の間近に迫っていたが、掃除は行き届き、シーツも清潔だった。むろん便所は水洗だし、湯を張れば入れる浅い浴槽もある。フアゼンダの粗末な小屋と比べると宮殿の一室のようだった。フサノは顔を洗い、着ていた衣類を全て脱ぎ捨てると、持ってきた手ぬぐいを濡らし、きつく絞って全身を拭った。身体が軽くなったような気がした。フサノは部屋のドアが施錠されているのを確かめ、裸のままベッドに倒れ込むと、眠りに落ちた。

どれくらい眠ったのだろう。目を覚ますと夕暮れが迫っていた。懐中時計を持っている訳でもないし、部屋にも時計はない。

空腹だった。持ってきた風呂敷包みには乾し肉とバナナが残っていた。瓶にもコーヒーがある。フサノはかぶりつき、コーヒーで流し込んだ。腹がいっぱいになると満たされた気分になった。

宿の主人はフロントのカウンターに持たれて新聞を眺めていた。フサノが立派な街だと誉めると、嬉しそうに三十万ほどの人口だと言った。フサノは主人に部屋の鍵を預けると、表に出た。日没にはまだ時間があった。フサノはとりあえずサンパウロの街の様子を見て歩くことにした。道に迷ったらルス駅に戻ればよい。歩き回れば、自分の前途を切り拓く何かに行き当たるかも知れない。犬も歩けば棒に当たると言うではないか。三日三晩、鉄道線路沿いに歩き、さらに十二時間も列車に揺られたにしては、疲れはほとんど感じられなかった。若いからねえ、まだ十六歳だもの、私は。

ホテルで教えられた街の中心部はセー広場といい、大きな教会の建物がそびえていた。人々はカテドラルと言って指さした。その界限を小一時間ほど歩き回り、最初は物珍しきでキョロキョロしていたフサノだったが、だんだん心細くなってきた。若い娘が暗くなった街路を一人でうろついて

いたら、悪い男に何をされるか知れない。乱暴された挙げ句、売り飛ばされると聞いたことがある。それならまだしも、殺されるかも知れない。それまで物見遊山のようにゆつくりしていたフサノの足取りが速くなった。誰でもよいからまともな相手を見つけてすがりつきたくなっていた。

歩き回る犬が棒に当たると、フサノは新聞記者にぶつかっていた。口をきつと閉じ、まなじりを決して足早に歩くフサノの前方に、こちらにやってくる二人の男の姿が浮かび上がった。その体型、歩き方から日本人だと直感した。フサノは人恋しさと日本人という安心感から、駆け出していった二人に飛びついた。体型が欧米人風だったら、そんな危ないことはしなかっただろう。

間違いなく二人の男は日本人で、移民でやってきた日本人相手に日本語の新聞を出している会社の記者だった。二人はフサノからサンパウロにやってきたいきさつを聞くと、自分たちが働いている新聞社に連れて行ってくれた。坂の途中にある二階建ての木造建築だった。

### 邦字紙『伯刺西爾時報』

ブラジルの邦字紙は、フサノが渡航する前年一九一六年に創刊された『週刊南米』と『日伯新聞』、渡航した年に出た移民組合の機関紙『伯刺西爾時報』があり、どこも家族経営に毛の生えたような小さな世帯で、しかも人手不足だった。フサノが飛びついた男たちは一番あとに創刊された『伯刺西爾時報』の記者だった。そのままフサノは雑用係の仕事にありつくことができた。

この『伯刺西爾時報』は「南米唯一のふりがなつき邦字新聞」を売り物に週一回、金曜日に発行されていた。『日伯新聞』が自由主義的で、大使や総領事を「君」と呼び、日本の出先機関や移民

会社を批判していたのに対し、『伯刺西爾時報』は日本移民の不平を抑えるための道徳的説教を好んで論説にし、故国の様子を伝える日本通信に力点を置く紙面作りだった。

新聞社で一番の下っ端ではあったが、ファゼンダを飛び出し、サンパウロに着いた日に食い扶持にありついたのでから、フサノはかなりの強運の持ち主と言つてよいだろう。寝泊まりも、住処が見つかるまでは会社の一室を使つてよいことになった。印刷工場の職工たちが寝泊まりしているらしく、狭くてタバコ臭く、男たちの汗と脂の臭いが染みついている、薄汚かった。それでもフサノはくるまった毛布の下で幸運を噛みしめた。

まったくの偶然だったが、同じ若狭丸に乗っていた半田知雄も十一歳で入植したあと、一九二〇年に十四歳でサンパウロに出て、十八歳までフサノと同じ『伯刺西爾時報』で選字工として働くことになる。半田の著書『今なお旅路にあり』にも「ファグンデス街のブラジル時報社の一室に住んでいた」と記されている。小さな会社だから、面識があるのは当然だが、半田の存在はフサノにとつて一人の少年工以上のものではなく、特段の記憶は残らなかった。

最初の給料が出ると、フサノは日本人が多く暮らしているコンデ・デ・サルゼーダス街、通称コンデという地区の東の外れに部屋を借り、そこからリベルダーデ大通りに面した新聞社まで歩いて通つた。サルゼーダス伯爵の土地という名前には似つかわしくないごみごみとした下町で、漂ってくる味噌汁の匂いが、そこが日本人街だと教えてくれた。コンデ界隈は東側がぐつと低く、南西に向かつて高くなる地形で、出勤時は急な上り勾配が続く。フサノはあえて最短距離を避けた。途中

に怪しげな男たちがたむろする一角があったからだ。そのため、通勤路は一キロメートルほどになったが、ファゼンダ育ちの健脚にとつては上り坂でも十五分たらずの道のりだった。

コンデに日本人が住み始めたのは一九一二年頃からである。普通、二年の契約期間が終わると八〇%の移民は独立するためほかのファゼンダに移り、土地の所有者と収穫を分け合う自作農となっていくが、農作業の辛さからサンパウロに活路を求める者も跡を絶たなかった。移民はポルトガル語を流暢に操ることができないこともあつて、クリーニング屋、ペンキ屋、大工、八百屋、籐細工や木製玩具の製造などを生業とすることが多かった。そうした職業なら、あまり口をきく必要もない。元手も少なくてすむし、家族全員で働くことができる。

フサノが借りたのはポロンと呼ばれる半地下室で、入り口に扉はなく、床はセメントのたたきのままだった。窓からは坂道を行き交う行人の膝から下だけが見えた。その小さな窓には鉄格子がはまっているものの、ガラスはなかった。サンパウロの中心部の街灯はガス灯から電灯に変わっていたが、ポロンからは石油ランプの明かりが漏れていた。日当たりは悪く、カビ臭かった。

しかし、家賃は同じ建物の階上の部屋の半分と、とにかく安かったし、市の中心部まで歩いて往復できる立地の良さも備えていた。フサノは中古の寝台と枯れ葉を詰めた敷き布団コルシヨンの新品を買った。ファゼンダを出たときの所持金にひびくほどの金額ではなかった。

フサノが新聞社の雑用係として働き始めた頃、賃金や生活費はどのようなものだったのか。半田知雄の著書『移民の生活の歴史』から抜き出すと次のようになる。

通貨はミル・レイスが基本で、一ミル・レイスは一千レアル。レアルはレイスの複数形だか

ら、一ミル・レイスは一千レイスである。当時、一ミル・レイスは日本円で六十三銭に相当した。紙幣は一、五、十、二十、五十、百、二百、五百ミル・レイス、硬貨は一ミル・レイスと二ミル・レイスの銀貨、帝政時代からの百レイスと二百レイスのニツケル貨、二十レイスのピンテン銅貨があった。

大工や鍛冶屋の日給は五ミル・レイス、洋裁師の日給は四ミル五百レイスで、家庭労働は女が月給十五ミル・レイス、少年が十ミル・レイスだった。それぞれ日本円で三円十五銭、二円八十三銭五厘、九円四十五銭、六円三十銭である。ファゼンダの日給は家族で二ミル・レイス、一円二十六銭だったから、それと比べると大工や鍛冶屋、洋裁師なら都会の物価高を差し引いても悪くはない。ちなみに一九二〇（大正九）年の日本国内の日雇いの賃金は一円六十銭だったから、腕に覚えさえあればサンパウロではそれなりの稼ぎにありつくことができた。

宿は、板敷きにゴロ寝という最低限のところなら一泊二百レイス、食事をつければ二食で五百レイスだった。一カ月十八ミル・レイスの下宿には洗濯サービスまでついていた。

ソルチードと呼ばれる定食はパン付きで五百レイス。油飯にフェイジョン豆と薄い牛肉が載っており、時には二きれほどのジャガイモのフライもついた。パンを取らずに無料のマンジョーカの粉をかけて腹を膨らせば四百レイスで済んだ。

とにかく、百レイス、六銭三厘ほどでバナナが一ダース買えたり、牛肉は一キログラム三百レイス、米一リットルは三百レイスから四百レイス。百レイスのパンもかなり大きかったから、腹を膨らすだけならかなり安上がりで済ますことができた。

交通費も高くはなかった。ボンデと呼ばれる路面電車の運賃は二百レイス均一だったし、ちよつと張り込んでルス駅からコンデ界限まで黒い制服に山高帽の御者が操る馬車を使つても四ミル・レイスだった。ボンデはルス駅に着いたとき驚かされた、煙を吐かない汽車のような乗り物である。

新聞は邦字紙が百レイス、ポルトガル語のオ・エスタードが二百レイスだった。

フサノの月給は家政婦と同じ九円四十五銭だった。ファゼンダの日給と比べても、安くこき使われるのだと思つた。しかし、不満など言つていられない。とにかく飯の種にありつくことができたのだ。

標高七百六十メートルのサンパウロは、日本人が思い描いている「常夏の国」とはほど遠い。十二月から三月にかけての夏には摂氏三十度以上にもなるが、最も寒い七月には摂氏十度以下になることもある。朝と夜では十度以上の気温差があり、風邪を引きやすいが、上から羽織るものさえ用意しておけば、窓にガラスがなくても何とかしのぐことができた。薄給の身には有難かつた。

### 伯爵夫人の館

雑用係はほかの社員より早く出社し、受け持ちの部屋の掃除を済ませておかなければならない。朝五時過ぎ、ポロンの前の通りで、農民が売りに来るヤギの乳を待つのが日課となつた。農家の男たちが、十頭から二十頭ものヤギを横並びにつなぎ、はち切れそうな乳房から乳を搾り出す。コップにヤギの乳を入れてもらい、部屋に戻つてコーヒーと一緒に飲み干す。そんなブラジル風の朝食を済ますと、フサノは石畳の道を新聞社へ向かつた。

煉瓦状の花崗岩を敷き詰めた石畳の上を、ガタゴトと大きな音を立てながら馬車が行き交っている。リベルダーデ大通りには、吹きさらしの座席が並んだ路面電車ボンデが走っていた。

フサノは毎朝、急なコンデ坂を登り、日本人が「お城」と呼ぶ広大な館の前を通って新聞社に通った。お城は白っぽい縁取りがされた赤い二階建てで、さらに二階分の塔屋があり、朝日を浴びて輝いていた。いつの間にか、フサノはルス馱の建物の次の目標、それも人生の階段を上るうえで次に目指すべき到達点に、この赤い館を選んでいった。朝夕、お城の前を通りながら口の中で願掛けのようにつぶやき続けた。いまに天から降ってくる。

フサノは心の中で誓った。いまはコンデの狭くてカビ臭い部屋に住み、新聞社で雑用係をしているが、与えられた仕事を一所懸命に務めていれば、必ずよいことがある。お城の主人を羨むのではなく、一里塚のような人生のひとつの目標にするのだ。そんな自分を天は見えてくれるだろう。頑張れば、誰かが認めてくれるものだ。

新聞社で聞いてみると、「お城」はポルトガル中部にルーツを持つサルゼーダス伯爵の館で、サンパウロ中心部に人が住むようになるまでは周囲に広大な荘園が広がっていたという。

ブラジルという国は、どの支配者も無尽蔵とも思われるほど豊かな天然資源を、奴隷労働によって削り取ってきた。西暦一五〇〇年にポルトガル人が最初の一步を記し、植民地となったブラジルは、当初は楽器の原材料となるパウ・ブラジルの木、次に栽培したサトウキビ、そしてコーヒーなどの産物をヨーロッパに輸出するに当たり、インディオに始まり、原住民グアラニーやアフリカ大陸から連行した黒人を奴隷とし、ポルトガルに巨万の富をもたらしてきた。

一八〇七年、ナポレオン戦争によってフランス軍がポルトガルに侵攻すると、ポルトガル国王ジョアン六世は首都をリスボンからリオデジャネイロに遷都する。ナポレオンの失脚後、リオデジャネイロのポルトガル宮廷はリスボンに帰還するが、ブラジルに残留した王太子ペドロをブルジョア勢力が担いで独立を宣言する。ポルトガルとの戦争を経て一八二二年、ブラジル帝国は独立し、ペドロ一世が即位した。一八八八年、西半球最後のブラジルの奴隷制度が廃止されると、後継者のペドロ二世は大農園主らの支持を失い、一八八九年のクーデターによって帝政は崩壊した。

フサノがサンパウロで暮らすようになったのは帝政崩壊から三十一年後のことだったが、流血を伴う政変でなかったことも幸いして、帝政時代の貴族や支配階級が昔ながらの暮らしを続けていた。サルゼーダス伯爵の館もそのひとつだった。

コンデのお城には、マリア・アントニエッタという名の陽気な黒人の家政婦が働いていた。フサノは通勤の道すがら、朝夕、ボンジーア、ボアタールデと挨拶を交わすようになった。伯爵は大分前に亡くなったが、残されたコンテッサ、つまり伯爵夫人の身の回りの世話をしているとのことだった。

やがてフサノは書物でフランスとポルトガルの関係を知るにつれ、伯爵家の複雑な心理を見せつけられたような気がした。大航海時代とは違い、フランスがルイ王朝時代に栄えたのとは逆に、ポルトガルは凋落の道をたどった。ナポレオンの時代にはフランスに攻め込まれて、ブラジルへの遷都を余儀なくされた。その憎きフランスの王妃マリー・アントワネットの名を黒人の召使いに名乗らせ、日々呼びつける。それで溜飲が下がるとは思えなかったが、マリア・アントニエッタの名は

ブラジル貴族の屈折した心根を表してあまりあるものだった。

## キャリアアップ

新聞社で働くようになって二カ月ほどして、フサノは次の行動に出た。わずかばかりの給料をやり繰りし、ファゼンダで貯めた金も足して、タイプライターの学校に通うことにしたのだ。

フサノが通った夜の部は、技術を身につけて職場で這い上がろうと、若い娘たちで盛況だった。まだブラジルの国産タイプライターはなく、使われていたのはアメリカ製のレミントンやコロナだった。フサノはブラジルの公用語であるポルトガル語ではなく、英文タイプのコースを選んだ。英文タイプなら世界のどこに行っても仕事があると聞いたからだ。日頃使っているポルトガル語は、英文タイプをマスターすれば自然と打てるようになるだろう。日本語で印刷される新聞の活字は、手書きの原稿を選字工が鉛版に組んでいる時代だったが、会社の事務にはタイプの需要があった。努力は実った。半年ほどして、フサノが英文タイプを習っていると知った新聞社の幹部が、フサノにポルトガル語の書類を打たせてみたのだ。それほど早く打てた訳ではなかったが、誤植もなく、そのままタイプリストに採用された。

フサノは会社の仕事でタイプを打つかわら、合間を見ては会社が定期購読している英語の雑誌やポルトガル語の新聞の記事の中から、世界と日本で起きている重大な出来事を選び、そのままなぞるようにタイプすることを日課にした。プロの物書きや記者の文章だ。変な言葉遣いや文法の誤りは少ないだろう。そうした文章を身体に覚えさせることは正しい英語やポルトガル語を身につけ

るのに役立つし、当然、タイプの腕も上がる。昔の人々が写本や写経をした目的も、同じようなところにあったのかも知れない、とフサノは思った。

フサノはこのとき、「ローマは一日にして成らず」「スロー・アンド・ステディ」「ステツプ・バイ・ステツプ」といった言葉をキーを叩きながら覚えた。日本語なら、つま「だ、だ、だ。」「いままに天から降ってくる」という眩きのあと、この言葉のどれかを付け加えるようになっていた。

タイピスト修行はフサノを物知りにしていった。インド洋を若狭丸で渡るとき、船員たちが恐れていたドイツの潜水艦による攻撃も、世界大戦の終結とともになくなっていた。自分も雇ったスペイン風邪で何千万人も人間が命を失ったこと、ロシアで革命が起きて皇帝が殺されたことも、出来事としては新聞記事を通して知っていたが、詳しい知識を得たのはタイプをしながらだった。

サンパウロでのタイピストとしての経験は、十年近くのち、フサノが上海ビジネスカレッジでステノタイプとショートハンドを履修するときに役立った。ステノタイプとは口述をタイプしていく高度な技量であり、ショートハンドは英文速記のことだ。

新聞社内の人間関係は、苦になるようなものはなかった。最初に出会った二人の新聞記者は、フサノにとって仕事にありつくことができたという意味では恩人だったが、女好きの遊び人たちでもあった。隙を見せると言い寄ってくる。露骨に性的な交わりを求めることすらあった。フサノは口実を作っては男たちをいなしていたが、そんな日々もタイピストになって新聞社の幹部と口をきくようになるとともに終わった。いかにも幹部と親しくしているように見せかけると、男たちは寄っ

てこなくなつた。フサノにとって幸いだったのは、新聞社の幹部が恐妻家で、身の危険を感じないですんだことだ。フサノは内心、幹部の細君に感謝した。

フサノがブラジルにいる間に日本は世界の一等国の一角に食い込み始めていた。サンパウロの日本人たちの会話でも大日本帝国という言い方が普通になり始めていた。

アメリカの要請で一九一八年、第一次世界大戦の終結を待たずにシベリアに出兵した日本は、一九一九年のパリ講和会議で中国山東省におけるドイツの権益を引き継ぐことが決まり、ベルサイユ条約で膠州湾の権益を獲得、南洋諸島についても信託統治することになった。一九二〇年には国際連盟が発足し、日本は常任理事国として強い発言権を持つに至つた。一九二二年のワシントン海軍軍縮条約では主力艦の比率を米英五に対して日本は三とされ、その屈辱感から、いやがうえにもナシヨナリズムが煽られることになった。日本は一九二三年いっぱい二十一年間続き、日露戦争を勝利に導いた日英同盟を破棄、軍事力でも米英と覇を競うようになっていく。イタリアではファシスト党のムッソリーニ内閣が発足、不況に喘ぐイタリア国民の叫びを受けて国家社会主義の道へと踏み出していった。

## アマゾンおケイ

タイピストの仕事がうまく行き始めると、給料は雑用係のときの三倍以上になった。住処も地下のポロンから二階の部屋に移ることができた。今度はちゃんとドアも窓ガラスもはまっている。フサノは、手に職をつけるとは、昔の人間はうまいことを言ったものだと思つた。そして、もっと技

術を身につけようと、今度はダンス教室に通い始めた。タイプのアとは脚だ。脚に職をつけよう。その駄洒落にフサノは一人でクスツと笑った。脚でも稼げるようになったら言うことはない。

ブラジルといえば、コーヒーとともに誰もが思い浮かべるのは毎年二月のカルナバル、有名なリオやサンパウロのカーニバルである。フサノがダンスに関心を持ったのもカーニバルがきっかけだった。

ピチピチした身体の大半を露出した踊り子たちが、数百メートルにもわたる踊りのための特設道路サンボドロモを、サンバのリズムに乗って何時間もかけてジグザグに練り歩く。両側には十段ほどに組み上げられた見物席が並び、飾り立てられた巨大な山車だしの上では、全裸に近い踊り子が男たちを挑発するかのように腰をくねらせている。十四歳で初めてカーニバルを見た半田知雄が画文集『ブラジル移民の生活』の中で「これだけおおっぴらなストリップショーはどこの世界にもないだろう」と書いているそのままの光景である。

フサノは踊り子たちを眺めながら、やはり肉体美を誇示して踊るにはアフリカ大陸の血が入った褐色の肌の乙女たちが一番だと思った。尻はほかの人種の腰のあたりほどに高く、とにかく足が長い。胸も砲弾のように飛び出している。いかに胸が大きいといっても、白人はすぐに垂れ下がりがそうで、弾力に欠ける印象がある。自分も東洋人としては肉体に自信がない訳ではなかったが、踊り子たちと競うには見るからに迫力に欠ける。

眠りにつく前、フサノは洗面台についている小さな鏡に自分の肉体を映しながら思った。踊り子たちにまじって肉体をひけらかすより、脳みそで勝負できる女になりたい。タイプも打てる。日本

語のほかにポルトガル語と英語も多少はできる。あとは磨きをかけていくだけだ。覚えただけの淑女、才色兼備という言葉が頭に浮かんだ。日本から届いた雑誌の記事にあった言葉だ。フサノは踊り子たちの軽快なステップを思い浮かべながら、淑女になるためにダンスを覚えたいと思った。才色兼備と言われるためにはダンスもうまく踊れなくては。

フサノのダンスへの憧れは映画によって加速されていった。

少し暮らしにゆとりができると、フサノはしばしば映画館に通った。半田知雄の記録では、サンパウロの中心部にはテアトロ・サンパウロ、シネ・コングレツソ、シネ・ロザリーオなどの映画館があり、日本人がコンデ街から出かけるのに便利だったのは、パテー・パラシオとテアトロ・サンパウロだった。フォックス、パラマウント、ユニバーサルなどのアメリカ映画が上映されていて、入場料は一ミル・レイスカ一ミル五百レイス。大工でも上着にネクタイを着け、道具箱を担いでいた時代だから、映画館に入るにもきちんとした身なりでなければならなかった。

そこでフサノはイサドラ・ダンカンと出会った。イサドラは二十世紀を代表するアメリカのダンサーで、モダンダンスの祖とされている。銀幕の中のイサドラは、おりからのギリシャ・リバイバルのブームに乗ったギリシャ風の衣装を身につけ、なんと裸足で軽やかに踊っていた。フサノは『アラベスク』という踊りが気に入った。何という自由さ。女が男たちの頸木くびぎから解き放たれた象徴のようだと思った。フサノはイサドラにはまり、いつか自分も同じように踊れるようになりたいと思った。

イサドラは一九二七年九月、フランスのニースで五十歳の生涯を終える。首からなびかせていた

長いスカーフが横を通った自動車の車輪に巻き込まれ、転倒したのだ。以来、フサノはスカーフやマフラーを長くしている若者を見ると、危ないからやめるよう忠告するようになった。それほどイサドラはフサノの記憶に深く刻みつけられていた。

いくつかのダンス教習所を訪ねた後、フサノは一番感じのよい教師が応接してくれたスタジオに通うことにした。リベルダーデ大通りの裏手、カテドラルに近い場所だった。教習所のオーナーは黒髪を後ろにまとめた四十がらみのアルゼンチン女性で、ベニータと名乗った。フラメンコでもタンゴでもサンバでも何でもござれというように引き締まった体つきをしていた。フサノが最初に会った優しい教師はオルガという五十年配のロシア女性だった。ロシア革命が起きる前に家族と一緒にスペイン、ポルトガルを経てブラジルに渡ってきたという。優しい接し方は苦労人のせいだろう。

イサドラ・ダンカンに憧れたフサノだったが、最初はワルツくらいは踊れるようになるうといった軽い気持ちだった。それが、少し踊れるようになる、オルガはトウシューズを履くように命じた。自分のどこに素質があると思われたのかわからなかったが、フサノは教師の指示に従った。オルガは若い頃、サンクトペテルブルクでバレエの踊り子だったと明かした。フサノは自分がクラシックバレエを踊ることなど考えもしなかったが、モダンバレエなら踊れると楽しいかも知れないと思った。それはイサドラ・ダンカンの世界だ。

しかし、オルガが貸してくれたトウシューズを履き、足の指を伸ばしたままつま先立ちしようとすると、痛くてとてできない。何日も続けるうち爪の内側に血マメができ、やがて爪が剥がれた。

足の関節に大小のマメができた。それでもフサノは包帯を巻いてトウシューズを履き続けた。悲鳴を上げたいほどの痛みが走ったが、少しずつま先立ちできるようになっていく喜びが痛みを打ち負かした。オルガは優しい眼差しで教え子の様子を見守っていた。

結局、フサノはこのダンス教習所に二年半ほど通うことになった。生徒だったのは最初の半年ほどで、あとの二年間は新聞社の仕事が終わったあと、助手としてレッスンを手伝う毎日だった。『伯刺西爾時報』は週刊の時代だったから、午後四時を過ぎると退勤することが許された。そのうちオルガはナイトクラブの踊り子のチームに加わるよう誘ってくれ、観客の前で踊りを披露する仕事はフサノの向上心をさらに刺激した。フサノはフラメンコ・ダンスのモニョと呼ばれる髪型が好きで、髪を頭の後ろに小さな団子にしてまとめ、衣装もフラメンコ風のアレンジにした。

ある日、フサノはオルガからタクシーダンスサーという仕事があることを教えられた。いつか金を貯めて日本に帰りたいと打ち明けたときのことだ。オルガは「帰ることが出来る国があるなんて、羨ましいわ」と溜息まじりに呟いた。オルガの祖国は革命でソビエト社会主義共和国連邦と名前が変わり、ブルジョアジーへの労働者階級による流血を伴う追及の嵐が吹き荒れていた。オルガの親類縁者も、外国に脱出できなかった者の多くが命を落としていた。

オルガに教えられたタクシーダンスサーとは一九二〇年頃からアメリカではやり出したダンスホールのシステムで、ブラジルにも入ってきていた。チケットを購入した客が待機しているダンスサーを指名し、一枚のチケットで一曲踊ることができた。一曲は二分ほどで終わるから、客はチケットを何枚も買わなくてはならない。ダンスホールに上がりの半分を持って行かれるにしても、売れっ子

になれば新聞社の給料はもとより、クラブのバックダンサーの何倍もの実入りになる。

その話を聞いて、フサノは身体をこわばらせた。娼婦という言葉がよぎったからだ。タクシーダンサーにはタクシーのように誰でも利用できる、つまり誰でも身体の上に乗せるという意味がある。事実、ダンスホールに通ってくる客の多くは閉店後にダンサーを連れ出すことが目当てだった。フアゼンダを逃げ出したのはよいが、夜の女に身を落とした話は日本移民も例外ではない。初期の移民の中にはサントス港まで逃げてきたものの、帰国する金もなく、亭主は港の肉体労働、妻は娼家で働くはめになったという哀話は、何度も耳にしていた。

横で話を聞いていたベニータが言った。「店が閉まるまでに踊るだけ踊って、チケットをいっぱい使わせて、あとは黙って姿を消せばいいのよ。閉店後に付き合うなんて言わなければ、客は怒らないし、次の日も指名してくれるよ。賢い娘はみんなそうしているの」。フサノはそんなにうまく行くかどうか不安だったが、二人に紹介されたダンスホールに出てみることにした。

指名をいっばいとるには覚えやすい名前がよいといわれ、フサノはケイと名乗った。とつさに「桂」という文字が浮かんだからだ。

二十歳を前にした若いケイは、ほかに日本人ダンサーがいなかったこともあって、椅子に座るヒマもないほどの指名を受けた。時にはクラブのバックダンサーとして踊り、ダンスホールにも出る。新聞社の給料と合わせて、フサノの蓄えはみるみるうちに増えていった。ケイの名は、その後、フサノの一生について回ることになる。

老年期になっても、フサノは興が乗ると「私はブラジル育ちのアマゾンおケイだから」と嬉しそ

うにしていた。その呼び方がよほど気に入っていたようで、フサノは物書きの末席を汚すようになった息子の和久にも「お母さんのことを本に書くときがあれば、題は『アマゾンおケイ』にしておくれ」と繰り返し返した。それはフサノの遺言のひとつとなり、本書として結実した。本書のタイトルの命名者はフサノ自身である。

## 関東大震災

そんなブラジルの日々にも、日本を襲った災厄が影を落とした。一九二三（大正十二）年九月一日の関東大震災である。東京一帯は壊滅状態となり、死者は十万人に達した。その報せはすぐにサンパウロにも届き、『伯刺西爾時報』をはじめとする邦字紙も「此世からなる地獄の阿修羅、阿鼻叫喚の大惨事」（九月七日付紙面）などと一面トップで報じた。週刊紙なので速報するために号外を発行し、フサノも同僚たちと街頭に出て声を張り上げ、祖国の急を伝えた。

このころ三紙の邦字紙は競争の時代に入っていたが、このときばかりは一致団結した。三紙は協力して義援金募集団を結成し、十月末日を締め切りとして義援金集めに走った。各紙の十二月七日付紙面によると集まった義援金は日本円の二十五万円ほどにあたる三百九十五コントス。月給一千円だった当時の首相が二十年働いた分に相当する。

義援金募集団はこの金で毛布二万枚を購入し、十月十日と十一月十七日の二回に分けて、日本に送った。運賃は大阪商船が負担した。

外務省通商局発行の『外国義捐金品一覽表 大正十三年四月三十日現在』によると、アメリカ、

支那、イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ドイツ、オーストリア、イタリア、南米諸国などから金品が寄せられ、総額二千二百四十万三千三百二十七円七十九銭。ブラジルだけで百四十万八千九百六十四円にのぼった。国家予算が一般会計の歳出額で十五億三千万円の時代である。義援金に込められた在外邦人の祖国を思う気持ちがわかる。フサノも義援金募集を手伝っただけでなく、自分でも金一封を差し出した。

日本政府も被災者救済の一環として震災移民を募り、一人当たり補助金二百円を支給した。第一回は百十人がブラジルに渡航し、これを機に南米移住が日本の国策となっていた。

### ブラジル革命のバリケード

足かけ五年ほどサンパウロで暮らしたフサノだったが、最も鮮烈な印象を刻みつけられたのは一九二四年のブラジル革命の市街戦だった。

ブラジル軍のテネンテスと呼ばれる下級将校たちは一九二二年、コーヒー生産者に支配されるベルナルデス政権の寡頭支配体制と軍部の扱いへの不満から反乱を起こし、リオデジャネイロのコパカバーナ要塞で蜂起した。そして、一九二四年にはサンパウロでもバリケードを挟んで政府軍と市街戦を展開した。テネンテとは少尉、中尉、大尉などの下級将校のことで、テネンテスはその複数形である。この青年将校たちの運動は、やがて一九三〇年のヴァルガスによる軍事クーデターへとつながり、独裁体制時代を経たものの、ブラジルの近代化に大きな役割を果たすことになる。

物見高さでは、ラテン気質丸出しのブラジル人に勝る民はいないだろう。陽気なサンパウロ市民

たちは、まるでカーニバルを見物するかのようになり、テネンテスと政府軍のバリケードの様子をのぞいて歩き、どちらの人数が多く、武器は何を備えているかといった話で盛り上がった。バリケードは道路の敷石を剥がして積み重ねてあったが、このとき、市民たちは敷石が煉瓦のような小さなものではなく、長さ一メートルほどの四角い石柱が埋め込まれていることを知った。

やがて、これが戦争ごっこではないことがわかった。にらみ合いが続いたあと、どちらからともなく銃撃が始まり、機関銃による威嚇射撃が行われたのだ。

事あれかしといささかの緊張感を楽しんでいたフサノも、これにはたまらず駆け出した。市民に当たらないように撃っているかわかっているにもかかわらず、耳許を銃弾がかすめているような気がする。靴が脱げかけて転びそうになった瞬間、ブラジル人の青年がフサノを抱えて建物の陰に駆け込んでくれた。この青年がいなければ、自分は撃たれて死んでいたかも知れない。恐怖で身体が震えた。

三十年ほどして、フサノは息子の和久に男子の生き方を教えるとき、決まってサンパウロでの市街戦と自分を守ってくれたブラジル人青年のことを話して聞かせた。自分も命が危ないというのに、自分より弱い女性の命を優先して安全な場所に連れて行くなどということが、日本人の男にできるだろうか。もちろん日本の男にも立派な人物がいけない訳ではないが、なかなか見つかるものではない。男とはそのような立ち居振る舞いができないかもしれない。

この一九二四年七月の武力衝突は二十三日間続き、ジャーナリストのモアシル・アサンブション

によると、政府軍の砲撃によってサンパウロの市街地は破壊された。市外に脱出する市民はあとを絶たず、逃げられなかった人々は地下室で戦火が収まるのを待った。市民にも多数の死傷者が出たが、真相は封印され、正確な犠牲者数は今日になっても明らかにしていない。

美しいサンパウロの街が破壊されていく有り様を見て、フサノの頭にファゼンダを飛び出したときと同様、「潮時」という言葉が浮かぶようになった。地方では敗残兵が暴行や略奪を繰り返しているという。しばらくの間、ブラジルの国内が落ち着かないのは目に見えていた。

フサノはサンパウロへの離れがたい思いを断ち切った。英語とポルトガル語の日常会話と基本的な読み書きは自信がある。両方の言葉はタイプも打てる。ナイトクラブのバックダンサーとはいえ、ダンスもステージに立って稼げるまでになった。タクシードンサーでも稼げるだろう。しかも、まだ二十一歳だ。これで満足したり、人生を諦めてよい訳はない。まずは淑女になるため、次の一歩を踏み出さなければ。フサノは、震災後の不況の中で復興の槌音が聞こえ始めた日本を想い、帰国することにした。このひと区切りもまた「潮時」と呼んでよいのだろう。

惜別にあたって、ベニータとオルガは金色と銀色のペアのトウシューズをくれた。二足のトウシューズは、それから五十年以上にわたってフサノの宝物となった。

## 祖国へ

一九二四年九月六日、フサノは大阪商船の貨客船かなだ丸でサントスをあとにした。この当時、大阪商船は、しかご丸、かなだ丸、たこま丸、ぱなま丸、しあとる丸、めきしこ丸の六千トン級貨

客船六隻を投入し、月一回、日本と南米の間を運航していた。サントス発七月二十五日のしかご丸には、まだ市街戦が続いていたこともあり、間に合わなかった。

七年前とは逆に、今度は赤道を南から北へと越える。それも大西洋だ。それを思うと、フサノは自分が沢山の経験を積んだような気がして口許がほころんだ。横浜到着は十二月二日。フサノは乗船するとすぐ、冬物を入れた頑丈な革のトランクに大阪商船のワッペンを貼り付けた。

かなだ丸の船客は一等九人、三等百八十六人。二等の設定はなかった。サントスから横浜までの運賃は一等八百三十五円、三等二百二十五円。フサノが支払った二百二十五円は、今日なら百万円ほどになる。三カ月近くの食事代まで含まれており、極端に高いというほどではないかも知れないが、移民には手にできない金額だった。ダンスの稼ぎがその負担を可能にしてくれた。足かけ八年で帰国できるのは奇跡に近かった。

船長が操船するブリッジに連なる上部構造物には一等の船室しかなく、三等の船室は甲板の真下にあった。幅十五メートルほどの船内に二百人近い船客を入れる部屋が組み込まれていて、内側の部屋には窓もなかった。幸い、復路の船客は少なく、フサノは好きな部屋を使ってよいと言われ、舷側に並ぶ丸窓から海を眺められる部屋で過ごすことになった。

船はサントスを出るとメキシコ湾岸のニューオリンズ、ガルベストン、パナマのクリストバル、ロサンゼルスに寄港した。往路はアフリカ経由で移民などをブラジルへと運び、復路はブラジルからアメリカにコーヒーを、アメリカから日本には綿花や機械、銑鉄を乗せ、パナマ運河、ロサンゼルス経由で横浜に帰港するという合理的で無駄のない運航計画になっていた。復路の八十六日間は、

サントスからロサンゼルスまで六十三日、さらに横浜まで二十三日である。

長い船旅だったが楽しみもあった。なにしろ貨物の積み下ろしがあるから寄港地には何日も停泊する。湾岸の美しい港町ペンサコラまで足を伸ばしたり、ロサンゼルスでは市中を見物して回った。船には若い女がいなかったから、フサノは中年男たちから可愛がられた。どこへ行くにも、何を食べるにも、金を払う必要はなかった。女は得だと思ったが、そう思う自分が気に入らなかつた。男と同じように扱われたと思った。このときは、まあよい、男だつて若いうちは先輩たちにおごつてもらうのが普通だから、と自分を納得させたが、自分が男だつたらという思いは、フサノの深いところで炎を上げ始めていた。

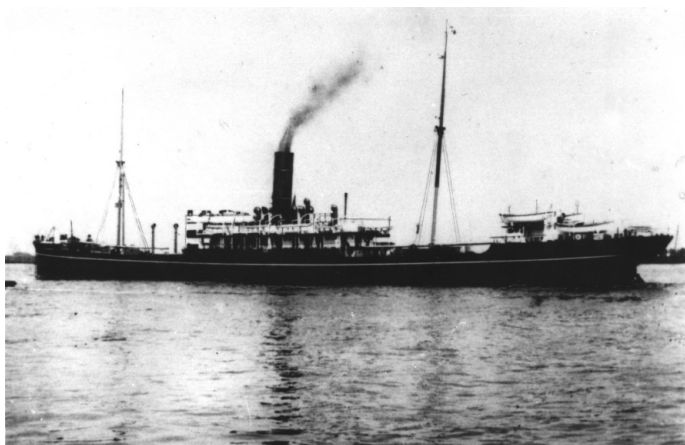
周りに大海原しか見えない航海中、フサノは持ち込んだタイプライターで腕を磨き、読書に没頭した。音がうるさいタイプの練習は昼間にして、夜は船室で読書を楽しんだ。タイプはインクリボンを節約するため、用紙だけをセットし、ひたすら英文の雑誌や新聞の記事を打ち込んだ。そうするうち、英文の記事の書き方、用語などの決まりがわかるようになり、自分もジャーナリストになれるかも知れないと思うようになった。タイプライターはサンパウロで買った中古のレミントンで、ごつく、スマートではなかつた。フサノはいつか、アメリカ製のアンダーウッドの高級機を買えるようになりたいと思った。

寄港地で金を使わなくてすんだ分、フサノはアメリカの新聞、雑誌、書籍を買い込んだ。フサノが生涯の愛読書とするトルストイやドストエフスキの作品の一部は、ニューオリンズとロサンゼルスで買い、航海中に読んだものだ。フサノはトルストイの『アンナ・カレーニナ』と『復活』の

英語版を枕元に置いた。いつしか、フサノは主人公のアンナやカチューシャの境遇に自らを重ね、思わず主人公の言葉を呟くほどに感情移入していた。



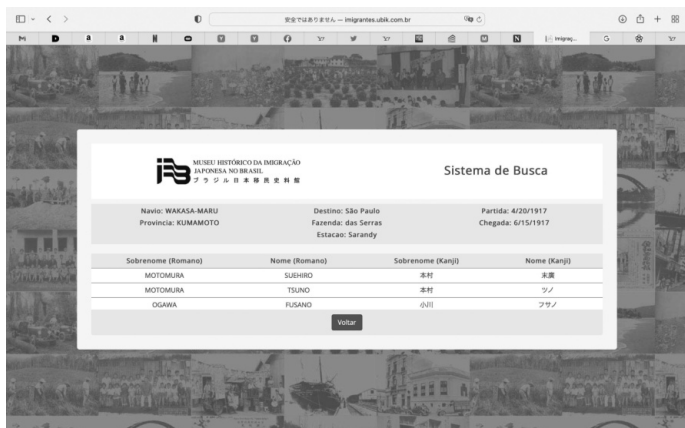
ブラジル渡航前の記念写真（13歳のフサノ、叔父夫婦と八代宮前の隈流軒写真館で）



フサノが乗船してブラジルへ向かった「若狭丸」  
(写真・日本郵船歴史博物館所蔵)



「若狭丸」船上に詰めこまれたブラジルへの移民。フサノ乗船時の写真ではないが、当時の移民船のようすがわかる（国立国会図書館ウェブサイト「ブラジル移民の100年」より転載）



小川フサノと叔父夫婦（本村末廣、ツノ）の若狭丸への乗船記録  
（ブラジル日本移民史料館ウェブサイト内「移民乗船リスト」より転載）



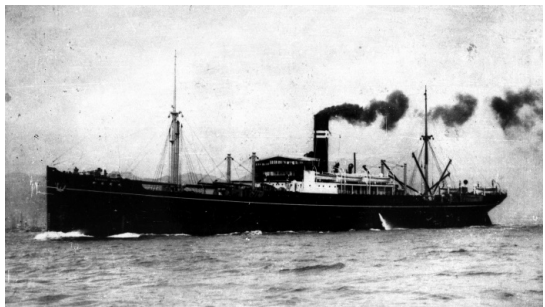
ファゼンダでの珈琲採取風景。1930年代  
（国立国会図書館ウェブサイト「ブラジル移民の100年」より転載）



1920年ごろのサンパウロ市街 Photo: Getty Images



サンパウロ、コンデ街のサルゼーダス伯爵邸  
(2022年現在 /Google Earthより引用)



フサノがブラジルからの帰国時に乗船した「かなだ丸」  
(写真・株式会社商船三井所蔵)

## 第4章 金と銀のトウシューズ

### ルーツ

十二月二日、横浜港に到着したフサノは八年ぶりに祖国の土を踏んだ。ほぼ三カ月を過ごしたかなだ丸を振り返り、別れを告げたフサノは、ここから新しい人生が始まるのだと自らに言い聞かせた。まずはひとかどの淑女になるため、自分に磨きをかけるのだ。そのための費用も必ず稼ぎ出す。迷うことはない。前に進むだけだ。

横浜港には父が迎えに来ていた。三次は熊本南の山深い村から列車を乗り継いでやってきた。そのとき、最初にフサノの中に去来したのは父への感謝の気持ちや懐かしさではなく、不思議なことに郵便事情への感慨だった。地球の反対側のブラジルから投函した手紙が熊本父のもとに届き、船名と到着の日時まで正確に伝わっている。これはすごいことだと、かなだ丸のタラップを降りながら、フサノは妙なところに感心していた。

三次はフサノに穏やかな笑みを投げかけ、「船旅はキツかったろう、具合の悪かところはなかね、ブラジルに行かせてすまんかった」と熊本弁で言った。三次は五十二歳。昔から変わらぬ坊主刈り

だったが、すっかりごま塩頭になっていた。中肉中背の引き締まった体つきは変わっていない。鼻は高く、相変わらずの男ぶりである。

父の顔を見た瞬間、フサノの中で嬉しいという思いと怒りに似た感情が交錯した。子供の頃から可愛がってくれた父親がわざわざ熊本から迎えに来てくれた。それは嬉しかった。だが、ブラジルに出稼ぎに行った娘を出迎えるからと言って、多額の汽車賃を払えるほどの身の上になったのか。自分の道楽や保証人の請け判で身代をなくし、姉のミシは芸者に出され、自分もブラジルで足かけ八年も暮らすはめになった。すぐ下の妹のトジユも女工に出されるようだ。今日の熊本からの汽車賃や宿代だって、娘たちの仕送りがあつてこそだ。何を考えている――。

それからのち、三次に對するフサノの屈折した思いは変わらず、十六年ほど後に家屋敷を買い与えてからも一線を引いたままだった。親孝行はする。だが、なれなれしくはしない。

道中、三次は家族の消息を手短に述べたばかりはフサノに話しかけなかった。横浜への道すがら、大阪、京都などで遊里に足を向け、遊んだに違いない。だから後ろめたいのだ、とフサノは思った。三次は横浜駅でシユウマイの入った弁当を買い、二人は黙々と口に運んだ。フサノはその沈黙が有難かった。父といえども、いまはあまり喋りたくない。列車は下関から鉄道連絡船に載せられて関門海峡を渡った。門司港に着くと、ホームに降りた三次は駅弁と素焼きの土瓶に入った緑茶を手に戻ってきた。「うん、やはり米は九州んとかうまか」。そして再び沈黙。三次は父親の善三郎ぜんざぶろうから家督相続してわずか二年で家を潰したことを恥じているようで、終生、無口を通した。

それでも三次は満足そうだった。乗ったのは三等車だったが、一等車、二等車を見わたしても、

フサノのように洋装が似合う女は見当たらない。フサノは旅行するのに楽な、ゆったりとした綿のブラウスにロングスカート姿。帽子は被らず、さりげない装いだだったが、行き交う人の目を引いた。三次はそれが嬉しくてたまらなかつた。さすが洋行帰りばい。サンパウロ仕込みだけん……。

フサノ親子は鹿児島本線の列車を一駅手前の日奈久ひなぐで降り、日奈久温泉の人力車で二見の村に入った。ブラジルを出てからここまで、靴が汚れたり傷んだりする場所はなかつた。それが、肥後二見駅から二見村の中心部までの道は、筑豊の炭鉱で使う坑木を積んだ馬車しか通らないデコボコ道で、ファゼンダで履いていたサパトンや兵隊靴でもない限り、歩けるものではなかつた。

フサノは母のミセや末の妹のシノブと顔を合わせ、ブラジル土産を渡した。トジユは紡績工場に働きに出ていた。フサノは三次とミセには数珠として使うように揃いの紫水晶のブレスレットを手渡した。ミシとトジユ、シノブには、のちに自分のカフェの名前となるアメリカの化粧品タンジの口紅。弟の武夫には小さな額に入ったブラジルの国旗。そのあとフサノは実家には泊まらず、待たせておいた人力車で日奈久温泉にとつて返し、大正館という木造三階建ての湯治宿に旅装を解いた。フサノの懐はゆとりがあり、人力車の駄賃や宿代を気にする必要はなかつた。

このあとフサノは、大阪に住む姉のミシが仕事口を探してくれるまでの一カ月ほどの間、日奈久温泉から人力車で行き帰りしながら、八年ぶりの故郷の山や川を眺め、幼い日の淡い思い出に浸ることができた。

そんなおり、小川家が何百年も暮らしてきた百済来に足を伸ばす機会があつた。祖父・小川善三

郎、曾祖父・善四郎、高祖父・善九郎ら祖先の墓参である。くたらぎと読む百済来は、のちに八代市坂本町百済来となるが、古代朝鮮の百済国くだらとの深い関わりを持つ土地だった。

百済来への道は二見を通る国道よりさらに狭く、坑木を山積みした馬車の幅ギリギリの山道だった。それでも道の横に深い谷が口を開けていない分、ファゼンダの中の道よりマシだとフサノは思った。フサノは、その山道を日奈久温泉の人力車でたどった。二見から東に五キロメートル行き、さらに南西に五キロメートル上った百済来の一番禺の小川内に小川家の墓と屋敷跡がある。

一通りの墓参のあと、フサノは赤星家に立ち寄った。赤星の家は九州の名族・菊地家きくぢの一門の末に連なり、フサノの従妹ツモの嫁ぎ先だった。ツモの夫・武興たけおきは赤星家の第三十七代当主。県立八代中学の一期生で大正初期にインドネシアに赤星貿易という会社を設立し、短期間に財をなした。そのさばけた気質はブラジル育ちのフサノとも波長が合った。床の間に飾られた戦国時代の鎖帷子くさりかたびらを着た甲冑を背に、泉水の錦鯉に目をやりながら、武興は小川家という不思議な家のことを語り始めた。フサノにとって初めて聞く話ばかりだった。

話が佳境に入ると、武興は気分を変えようと言ってフサノを連れ出した。そして、没落するまで小川家の屋敷があつた田畑の間から裏山に登り、古い五輪の塔にフサノを連れていった。土地の者が「小山の坊主」とも「黒法師さん」とも呼ぶ角々が欠けた五輪の塔。傍らには子供の墓らしい小さな五輪塔がある。これも小川家の先祖の墓で、京都から落ち延びてきた公家の末裔という伝承はここから出ていると武興は言った。フサノは、僧形に身をやつした落ち人の姿を想像した。

それから武興は小川内の村を北に向けて横切り、地藏堂と呼ばれる建物にフサノを案内した。そ

こには日羅の墓があつた。フサノは、初めて知つた日羅という人物の墓前に手を合わせた。

日羅は火の国葦北の国造・刑部鞞部阿利斯登の子で、日本書紀には天皇家以外の人物としては異例ともいえるほど紙幅が割かれ、詳述されている。

日本史の中の日羅の位置づけは、フサノが詣でた九年後の一九三三（昭和八）年四月十八日に行われた没後一千三百五十年の墓前祭を見れば明らかになる。執行者はシルクハットにモーニング姿の熊本県知事・鈴木敬一。東京帝国大学出身の内務官僚である。

この時期、県知事は政府から任命される官選だった。官選知事が執り行う神事とは、天皇家ゆかりのものと相場が決まっている。日羅の生家である刑部氏は第七代孝靈天皇より出た吉備族で吉備津彦の末裔とされる。日本書紀の研究書には、刑部氏は皇別氏族、つまり神武天皇以降に臣籍降下した分流・庶流の氏族との記述もある。日羅もまた、皇族でこそなかったが、天皇家と深く関わり、大和朝廷時代の日本と百済の外交史に大きな足跡を残した人物だった。

宣化天皇の二年（西暦五三七）十月、大連の**大伴金村**は新羅に侵攻された朝鮮半島南部の任那の騒乱を鎮め、同時に百済を救援すべく、息子の**狭手彦**を派遣した。副将は日羅だった。任那一带は日本の拠点が置かれていた土地である。狭手彦は肥前呼子で日羅と合流し、任那に渡った。呼子には、狭手彦と地元豪族の娘・**佐用姫**の恋物語が伝承されている。

任那に渡った日羅は、やがて百済の朝廷に仕え、出世していった。当時の百济朝廷は十六階の官位が定められており、日羅は上から二番目の達率まで上り詰める。いまなら閣僚である。「賢くして勇あり」という日羅の評判を聞いた敏達天皇は、任那の復興策を相談したいと使者を送るが、

百済の威徳王いとくおは洩り、三回目の使者として紀ノ國きのくにの国造・惠美押勝えみのおしかつ、のちの藤原仲麻呂ふじわらのなかまろらが迎えに行つて、日羅は百済国使二人を従えて帰国することができた。難波の津では敏達天皇自らが日羅を出迎え、天皇の前に跪ひざまずいた日羅はきらびやかな甲冑を脱いで献上した。このとき日羅は齡八十を超え、百済滞在は四十七年になろうとしていた。

日羅の館には、最高権力者の蘇我馬子そがのうまこ大臣らが天皇から派遣され、当時九歳だった聖徳太子も教えを請うたとされる。四天王寺などには日羅のことが聖徳太子の師として記されている。

百済の高官である日羅は、百済が日本の朝鮮出兵の虚を衝いて九州北部に兵を送り込み、足場を築こうとする目論みがあることを知っており、それを阻止したいと考えていた。日羅は、日本は出兵を急がず、国土防衛と民生の安定など足もとを固めるべきだと献策した。

これを知つた百済の国使たちは、日羅が百済を裏切ろうとしているのだと受け止め、日羅を刺殺する。日羅の亡骸は一旦難波小郡こごおりに葬られるが、息子穴目あなめによつて火の国に改葬された。宝亀元年（西暦七七〇年）、肥後の国司・檜前中納言政丸ひのくま まさまるは日羅の十一代目の子孫の加津羅かつらを訪ね、領地を与えて延命地藏菩薩を祀り、日羅の墓印とした。その後、どういう経緯からなのか日羅は勝軍地藏として各地に祀られるようになる。

フサノの生家小川家は、明治時代中期までこの日羅の墓を守る百済来の一帯を支配するように暮らしていた。そのこともあつて、百済来の村人には自分たちが日羅の末裔ではないかと思つている者も少なくなかつた。日羅のことを知つたあと、フサノは表向きは「まったく関係ない農民の子孫かも知れない」と笑い飛ばしてはいたが、内心では自分もまた日羅の血を引いているかも知れない

という思いを拭いきれずにいた。

日羅は、フサノの生涯を通じて幾度となく夢枕に立ち続けた。幼い頃に言い伝えを聞いた訳でもなく、姿を描いた画像を眺めたこともないのに、白く長い顎髭を生やした白装束の老人が夢のなかに現れるのである。長ずるに及んで、フサノはそれが日羅だと確信するようになった。

因縁や宿縁を信じた訳ではないが、フサノは白装束の老人に導かれるが如く不思議な星の下に生き、明治、大正、昭和、平成と続く時代の激流を泳ぎわたることになる。

フサノがブラジルから帰国した頃、小川家はささやかなゆとりを取り戻しつつあった。大阪で芸者をしている長女のミシ、そして次女のフサノのブラジルからの仕送りで、三男の武夫は工業学校に進み、四女のシノブは高等女学校に学べるようになっていた。その端境期のような時期にあって、三女のトジュが女工に出されたのは気の毒というほかなかった。

尋常小学校を出たあと紡績工場に働きに出て肺結核になったトジュは、一九二八（昭和三）年五月四日、十六歳で死んだ。フサノは、下里の村の墓地に三次の名でトジュの墓を建てた。

### ショーダンサー

フサノが自分のルーツに目覚めた頃、姉のミシから仕事の口が見つかったと知らせが入った。神戸のホテルの事務員兼タイピストで、英語とポルトガル語ができ、タイプを打てることが決め手となった。ホテルには外国人客も多く、英語の勉強にはもってこいの環境だった。フサノは張り切っ

た。

ホテルでの初日、フサノは洋書を扱っている海岸通り二丁目のJ・L・トンブソン商会を探し当て、ロンドンのマクミラン出版社が一九一八年に出した英文法教科書『アウトライン・オブ・イングリッシュ・グラマー』と三省堂のコンサイス英和辞典の一九二五（大正十四）年版を求めた。文法教科書は二円六十銭、英和辞典は二円だった。大正十三年当時、大工の一日の手間賃は三円あまりだったから、四円六十銭は高価な買い物だったが、フサノは必要な投資だと割り切っていた。英文法教科書は自分の英語の文法的な間違いを正すため、辞典は正確な日本語に翻訳する能力を備えるために必要な武器だった。

一週間目、フサノは帰国して初めてついた仕事で挫折を味わう。支配人をはじめ、男どもが執拗に迫ってきたからだ。狡猾な野獣が紳士の仮面を被っている職場だった。従業員寮に暮らす女の身に、隙あらばのし掛かろうとする。給料はさほど悪くなかったし、語学を磨くにはうってつけの仕事だったが、フサノはさっさと荷物をトランクに詰め込むと、大阪の姉のもとに向かった。意地汚い目つきの男どもに身体を開いてまで続ける仕事などない。

姉のミシはこのとき二十七歳。まだ大阪で芸者をしていたが、黒目がちの愛らしい顔立ちに頭の回転と気つぶの良さが加わり、羽振りのよい売れっ子だった。ほどなく生涯の伴侶となる新宅文蔵と出会い、幸せな家庭を営んでいく。文蔵は石川県津幡村牛首の出身。能登と加賀の境の地で、牛首は能登側にあたる。平安末期、木曾義仲が平家の大軍を破った倶利伽羅峠の古戦場でも知られる。文蔵は兼平の友禅工場の職長をしており、博打好きだが義侠心に富んだ男で、ミシを泣かせること

はなかつた。

ミシは気の強いフサノが頼ってくれたことが嬉しくてたまらず、これからフサノが何をしたいのかを事細かに尋ねた。フサノは思う存分勉強できるくらいに元手を稼ぎたいと答えた。生家の没落で学校に行く機会を逸したミシは、両目に涙を浮かべて聞いていたが、それから、まるで自分が進学でもするかのように、フサノの職を求めて知り合いを熱心に訪ねて回った。

神戸のホテルの件は失敗だったとミシは反省していた。語学を売り物にすれば良い職にありつけると思ったのが間違いだっただけだ。フサノが地味な造作の女なら何も起きなかつただろうが、いくら堅気の仮面を被っていても男は男。野郎どもの下心を刺激したのでは仕事もあつたものではない。

そうだ、とミシは膝を叩いた。フサノの女らしさを逆手に取ればいい。フサノは外国語ができるだけでなく、ダンスを踊れる。それもかなり上手いようだ。まずはダンスで稼ぐところから始めたらいのではないか。ミシは鼻<sup>ひな</sup>尻<sup>しつぽ</sup>にしてくれるダンスホールの経営者の顔を思い浮かべた。

日本のダンスホールは一八八三(明治十六)年に建てられた鹿鳴館がはしりだという説がある。もともとは欧米列強との不平等条約を改定する目的で、外国の賓客や外交官などを接待するために設けられた社交の場である。その政治的な性格から日本人は華族や高級官吏、軍の将官などしか出入りできなかったが、欧米の社交界を引き写したような夜ごとのダンスパーティーは、良家の子女にダンスを学ばせるだけでなく、日本にダンスを定着させる役割を果たし、やがて各地にダンス教室やダンスクラブが生まれた。大衆向けのダンスホールは大正時代に入ってから登場するが、一九二三(大正十二)年の関東大震災で壊滅状態になつた東京よりも大阪でブームとなり、それが

きつかけとなつて昭和初期にかけて東京、横浜にも続々とダンスホールが誕生した。

ダンスホールが普及すると、ホールに集う既婚の男女の恋愛沙汰が事件に発展することが多発し、それを防ぐためにホール側は美貌のダンサーを揃えてダンスの相手をさせるようになった。

東京の場合、大震災からの復興が進んだ一九二七（昭和二）年頃から本格的なダンスホールが再開し、大きなホールは専属のバンドを抱えて演奏させていた。男性にはドレスコードを定め、良家の子女をダンサーに雇ったホールもあった。

売れっ子ダンサーの稼ぎは破格だった。男性客はホールの入り口でチケットを買って入場し、好みの相手を指名して踊る。これはフサノがサンパウロで稼いだタクシーダンサーと同じ仕組みである。タクシーダンサーは一九二〇年頃にアメリカで生まれ、日本独自のシステムではない。

チケットは東京の場合、昼が一枚十銭、夜が二十銭。一曲や二曲で帰る客はいないから十枚綴りの回数券もあった。ダンサーの取り分は東京、大阪とも四割。一曲二分から三分で終わるから、指名が切れ目なく来る売れっ子は一日に三時間ほどの重労働に耐えられる若さがあれば、月に二百円から三百円の稼ぎになった。これは一九二五（大正十四）年の頃、大学を卒業した「学士様」の初任給五十円の四倍から六倍の金額で、今日なら百万円から百五十万円にあたる。

フサノはミシがダンスホールの仕事口を持ってきたとき、まったく抵抗はなかった。タクシーダンサーには十分な経験がある。サンパウロと比べても日本の男たちは植物的な印象が強く、恨みを買うような客あしらいさえしなければ、危険を感じることはなさそうだと思った。

ミシが大阪弁で言った。源氏名があるなあ。フサノでは固すぎるし、野暮つたい。フサノはサン

パウロで使っていたケイから、桂子と名乗ろうと思った。桂という字は好きだ。小川桂子。こうしてフサノは、当時の日本のダンスホールの中心だった大阪でダンサーに復帰した。

フサノがダンサーとしてフロア狭しと踊っていた頃、日本でもジャズが流行りだしていた。フサノは客が所望すると赤く塗った唇を艶やかに開き、チャールストンを踊って見せた。まだ、その頃の大阪でジャズのリズムに乗ってテンポよく機械仕掛けのように踊るダンサーは少なかった。

しかし、フサノ本人の好みはスローテンポの曲、それも日本の『カチューシャの唄』や『ゴンドラの唄』に身を委ねて踊ることだった。前者は一九一四（大正三）年の発表で島村抱月と相馬御風作詞、中山晋平作曲、後者は一九一五（大正四）年の発表で作詞は吉井勇、作曲は中山晋平である。両方ともフサノがブラジルに渡る前から流行っていたが、二十一歳になったいまだからこそ二つの唄に自らを仮託し、空想を羽ばたかせることができた。ブラジルから帰国するかなだ丸の船中で読んだトルストイの『復活』の物語と、カチューシャの唄が爆発的に流行するきっかけとなった松井須磨子主演の舞台劇『復活』が、自分の中では結びついているように感じた。フサノは客に『ゴンドラの唄』をバンドに演奏させるよう所望し、踊りながらこっそりと口ずさんだ。

命短し恋せよ乙女

あかき唇 褪せぬ間に

熱き血潮の 冷えぬ間に

明日の月日は ないものを

女が若さで輝く季節は短い。恋はともかく、早く勉強できる場所にたどり着くのだ。

勤め人の客がほとんどのダンスホールだったが、その日最初の指名客からは玄人の匂いが漂ってきた。少なくとも会社員や役人ではない。男はそれから三日続けてやってきて、フサノを十曲ずつ指名した。男は踊っている間中、全身でフサノの何かを観察するような気配を漂わせていた。

三日目のラストの曲が始まると、男が耳許で囁いた。劇場の舞台上で踊ってみないか。女を甘言で騙して売り飛ばす女術せづえでないことは、この三日間でわかっていった。

フサノは翌日の昼、指定された千日前せんぢちまへの甘味処に向向いた。男は興行師だった。ダンスホールが大盛況なのと軌を一にして劇場の出し物にもダンスが登場するようになる一方、ダンサーは人手不足だった。あれくらい踊れるのだから劇場でも大丈夫だと男は言った。フサノはサンパウロでタクシーダンサーのほかにはクラブのバックダンサーをしていたこと、モダンバレエの真似事くらいはできることを話した。男は翌日の同じ時刻、トウシューズを持ってこの甘味処に来るよう言った。

翌日の午後、連れて行かれたのは近くの敷島倶楽部という大きな劇場だった。十人ほどのダンサーが振付師の指示で踊っていた。興行師は同じ動きをできるかと尋ねた。三十分後、フサノはトウシューズを履いてダンサーの群の中にいた。即日採用ということになった。舞台がはねたあとや休演日はダンスホールで稼いでも良いという条件だった。フサノは胸の内、「ベニータ、オルガ、ここが大阪よ。舞台に立ったのよ」と呟いていた。二人に見て欲しかった。

かくしてフサノは舞台に立った。憧れのイサドラ・ダンカンが、ゴールドだとすると、ようやくスタートラインにたどり着いたという気分だった。敷島倶楽部での稼ぎはダンスホールよりずっと少なかったが、客の指名を待つて踊るのに比べて、スポットライトを浴びて踊る心地は格別だった。フサノの心中を見透かしたかのように興行師が言った。一本立ちすればうんと稼げるようになるよ。フサノは舞台とダンスホールで稼げるだけ稼ぎ、自立するための資金を貯めようと思った。それも若いうちに。いまは二十一だけでも、すぐに年増と呼ばれるようになる。

フサノは中之島公会堂として知られる大阪市中央公会堂でも舞台に立っている。

中之島公会堂は一九一一年（明治四十四）年、株式仲買人の岩本栄之助いわもとさけのすけが寄付した百万円をもとに一九一三年（大正二）に旧濱田藩はまたの蔵屋敷跡に着工され、一九一八（大正七）年に開館した。ネオ・ルネッサンスにバロック風を加えた様式の鉄骨煉瓦造り地上三階地下一階。様々な歌劇団の公演のほか、アルベルト・アインシュタイン、ヘレン・ケラーら歴史的人物の講演も行われてきた。

中之島公会堂の舞台に立ったとき、フサノは既に二年ほど敷島倶楽部でソロダンサーとして踊っていた。イサドラ・ダンカンのダンスが得意だった。中之島公会堂は晴れ舞台のようなものだった。フサノはイサドラの十八番、『アラベスク』を、彼女と同じように裸足で踊った。カーテンコールに応じてから舞台の袖に引っ込むと、待ち構えていた新聞記者たちがフサノを抱え上げ、楽屋まで運んだ。そのときの写真は大阪の新聞に載った。ダンサーとしては、この日がフサノの頂点だった。

フサノにはダンスのほかにも大切にしている日課があった。英語の勉強とタイプの練習である。

一日として怠ったことはない。両方とも、国際情勢などの知識を吸収することを兼ねており、新聞や雑誌の記事を英文で打ち込んでみると、まるで学校で授業を受けているような心地だった。

小さな転機はこの頃やってきた。稼ぎはよいし、ダンスも好きだ。ダンスホールの客だけでなく、新聞記者たちもちやほやしてくれる。しかし、どんどん増えていく知識を使って意見を戦わせるような相手は、身の回りにはいなかった。

アメリカの新聞は数年前に解消した日英同盟について日本は孤立すると書いているが、国と国との同盟とは男と女の関係のようなものだろうか。利害得失だけでなく、男女間のような感情もあるのだろうか。日本は孤立して、自分たちだけで生きていけるのか。誰も教えてくれそうになかった。このままでは語学の能力を活かすことすらおぼつかない。淑女になるという目標にもほど遠い環境。学ぶほどにフサノは毎日の生活に飽き足らなくなっていた。

姉のミシはフサノの気持ちを聞くと即座に言った。カフェをやったら、どうなん？ 外人相手の。それなら神戸より横浜やなあ。そうしよし。ミシは横浜だろうとどこだろうと一緒に行って手伝うと言ってくれた。芸者で鳴らした身だ。外人相手でも客あしらいには自信はある。ミシは文蔵と所帯を持って一年以上になるが、子供ができる気配はなく、文蔵も仕事が博打か知らないが留守がちだったから、フサノとの仕事に自分の居場所を見つけたい気持ちもあった。数日考えたあと、フサノは言った。横浜に行こう。カフェを出すくらいの蓄えは十分にできていた。

## カフェ「タンジ」

カフェはタンジーと名付けられた。場所は外国船が接岸する山下埠頭に面した山下町。タンジーはサンパウロ時代からフサノが愛用してきたアメリカ製化粧品の名前である。

タンジー化粧品は一九二〇年頃、薬剤師で製薬業界の不当な価格設定に立ち向かったジョージ・ウィリアム・ルフトが設立した香水会社が発売し、最初は口紅だけだった。Tansyの和名はヨモギギク。ルフトはTansyの花の明るいオレンジ色が好きで、それを商品名らしくTangeと綴った。

フサノにはTansyの花言葉が心に響いた。「平和」と「婦人の美德」。平和が大事なのもちろんだが、淑女を目指す自分には婦徳のほうが合っているだろう。運命の人と出会うまでは操を貫く。四十男との縁談を突きつけられ、ファゼンダで心に決めた日のことが浮かんだ。

タンジー化粧品の容器の蓋は無骨なガンメタル仕立ての真鍮だった。きらびやかな容器で客の目を引く必要などないというルフトの経営哲学だった。そうだ、人は中身で勝負するものだ。フサノはそれが気に入りに、深いブルーに塗られたカフェのドアの中央に、その蓋を模した円形の真鍮板を取り付けた。彫り込まれたTangeのロゴも化粧品の容器と同じサンセット・オレンジでまとめた。知る人ぞ知る会員制クラブ、といったたすまいである。品も悪くない。

最初から外人客を大入り満員にするため、フサノはひとつのビジネスモデルを考えついた。シップチャンドラーに外人客を連れてきてもらうのである。シップチャンドラーのことを知ったのはカフェにする物件を探していた不動産屋でのこと。物件の図面を抜けながら、主人は横浜英語でチャンドラーと言った。あいつらなら客を抱えているよ。

シップチャンネルの起源は世界の海を海賊船がわが物顔に動き回っていた頃に遡る。最初は船で使うキャンドル、つまりロウソクを供給する商売だったからチャンネルの名がついた。それによる小屋のような商売に手を広げていく。例えばカリブ海を根城とする海賊船がベネズエラのマラカイボ湾に入ると、港から駆け付けた小舟が横付けし、水、食料、日用品から女まで売りつけるし、注文された品々を届ける。その商売はいまに至るまで変わることなく続いている。

フサノは不動産屋の主人に知り合いのチャンネルを紹介してもらい、連れてくる外人客一人あたりの手数料を決め、チャンネル自身のみ代は只にすることで手を打った。

一人でも多く客を連れて行けば実入りが増えるから、チャンネルは本業と同じくらい力を入れて客を引いた。タンジーは開店当日から満員の盛況ぶりを見せた。フサノの日本人離れした立ち居振る舞いと芸者で磨いたミシの和服姿が人気を呼び、姉妹のカフェはたちまちのうちに軌道に乗った。開店からしばらくして、フサノは店にアメリカNCRC社製の金銭登録機を置いた。バーカウンターの引き出しに入りきれないほど入ってくる札束を管理するためだった。のちに金銭登録機はミシに譲られ、四十年ほど現役を務めた。

開店から三カ月ほどでフサノは同じ山下町の広い店にタンジーを移した。客が引きも切らなかつたからだ。今度はダンスのフロアも確保できたので、少しは踊れて片言の英語を喋る女給を置いた。バンドはピアノ、バイオリン、チェロのトリオ。音楽学校の学生アルバイトが交代でやってきた。

客は総じて船乗りだったが、貿易会社の社員もいた。フサノの物怖じしない態度と、英語や時にはポルトガル語を使ってみせる語学力を重宝がって、常連客が増えていった。日本の様子がわから

ない外人客は、フサノに街の案内ばかりでなく、買い物をする店まで頼るようになり、飲食の代金と同じくらのチップを弾んでくれた。

軍艦の乗組員も顔を見せるようになった。水兵と上官の關係にもお国柄が出る。フサノが感心したのはアメリカ海軍で、下士官と水兵がお互いをファーストネームで呼び合い、まるで家族のようだった。兄が酔った弟の面倒を見るように、肩を組み、尻を叩きながら船に戻っていく。この結末は実際の戦いで強い力となるだろう。その点、イギリス海軍はしやちこぼった印象だった。酔っていても水兵は上官の前では直立不動を求められる。下士官はともかく、士官ともなると水兵を見下す態度がありありと見え、水兵の卑屈な態度には階級社会の屈折した感情が見え隠れする。フサノは思った。負け戦になったら、水兵たちは後ろから上官を撃つかも知れない。

フサノが毛嫌いしていたのは、たまに寄港するフランスの軍艦の水兵たちで、とにかく酒癖が悪かった。鏝<sup>つば</sup>なしの水兵帽の白いカバーのてっぺんには赤いボンボンが載っている。濃紺のセーラー服の下はブルーの横縞のクルーネックのシャツ。色調はフランス国旗の赤、白、紺のトリコロールにまとめられている。その洒落た姿からは想像もできないほど、フランスの水兵は荒くれで、だらしなかった。酔っては喧嘩をし、乱暴狼藉の拳げ句、店の備品を壊したり、やりたい放題だったが、それを上官は制止できなかった。自分たちも泥酔していたからだ。フランス軍は強くない、満足に戦えないとフサノは思った。ナポレオンがヨーロッパを制覇したというのは、相手が弱かっただけではないか。ドイツの海軍も見たいと思ったが、その機会は訪れなかった。

フサノは各国の軍艦の公式行事がない日、タンジールのダンスフロアにテーブルを並べて昼食会を

催し、艦長ら士官を招待した。前もって相手の好みを聞き、和食、洋食、中華の料理を一流の店やホテルから取り寄せた。スラングしか喋らない水兵たちとは違い、士官は純白のテーブルクロスがかかった場所では上品で正しい英語を口にしてくれる。英語に磨きをかけるにはもってこいの機会でもあった。知識を増やすために国際情勢も話題にした。ただ、日本海軍を強いと思うかといったことは聞いたりしないことにした。日本の諜報員と間違えられては元も子もなくなる。フランス艦の艦長は、フサノがさりげなく水兵たちの様子を報告すると、申し訳なきように店の被害を弁償した。フランス人は女に弱い。

そんなことで、タンジールはフサノたちが思っていたよりはるかに儲かった。

一九二七（昭和二）年三月、片岡直温かたおかなおほる大蔵大臣が衆議院予算委員会で「東京渡辺銀行がとうとう破綻を致しました」と失言したのに端を発した昭和金融恐慌は、日本の経済活動を飲み込んでいった。取り付け騒ぎが始まり、銀行が相次いで休業に追い込まれる中、日本銀行が銀行に対する非常貸し出しに乗り出すなど、先の見えない不景気の霧が立ちこめていた。しかし、フサノたちのタンジールは外国の船員相手の現金商売ということで影響は少なかった。

この頃の出来事でフサノの記憶に残ったのは、東京の三越呉服店で日本初のファッションショーが行われたこと、映画『椿姫』を撮影中の女優・岡田嘉子おかたよしこが共演中の俳優と駆け落ちしたことくらいだった。その後も岡田は駆け落ち事件を起こす。岡田の人生の目的には、あらん限りの情熱で身を焦がすことしかないのだろう、自分とは違った種類の女なのだ、とフサノは思った。

姉のミシはもう一、二軒、店を出してはどうかと勧めてくれたが、フサノには別の望みがあった。

フサノが先々のことを思い始めたのはトジユの臨終に駆け付けた頃だった。トジユは十六歳で生涯を閉じた。自分だっていつどうなるかわかったものではない。初志貫徹を考えると、踏み出すのはいまだ。カフェをやっているだけでは上品な立ち居振る舞いや言葉遣い、ちゃんと学校に行つて勉強したのと同じような知識や教養は身につかない。語学力を活かすことができているだけだ。

それに、とフサノは思った。ブラジルに向かう若狭丸の上で南十字星を仰いだとき、自分には無限の可能性が広がっているように思えた。奴隷制の時代に毛の生えたようなファゼンダでの重労働も苦にならなかつた。サンパウロでは伯爵夫人の館を見上げながら、いまに天から降つてくるとつぶやき続けた。ダンサーで稼ぐ道を見つけたことで、滞在八年という例のない早さでブラジルから帰国することができた。大阪でのダンサー時代、そしてタンジーを開いたこの横浜。トントン拍子と言つてよい。天は間違ひなく運を与えてくれたとフサノは思った。だが、それで満足してよいのか。その運をもつと開いていくことができなければ、それこそ罰が当たるのではないか。

何者にも束縛されない自由な女になるという思いも日に日に強まっていた。男中心の社会の仕組みにも、男どもにも、左右されない生き方。女性解放運動の先頭に立つ平塚らいてうが雑誌『青鞥』の創刊号に寄せた発刊の辞、『元始、女性は太陽であつた』も図書館に行つて読んでみた。共鳴もしたが、いまひとつしっくりこなかつた。そんなに大上段に振りかぶらなくても、女ばかりで群れなくても、一人で道を切り開いていけるはずだと思つた。一匹オオカミと言われようと、一人一人の女が、それも性という女の武器を使わずに、自然に生きていける社会にしなければいけない。のちに一九五三（昭和二十八）年の参議院選挙東京地方区で市川房枝が当選を果たしたとき、白

髪を染めずにいる外見が似ていると言われ、フサノは内心で腹を立てた。外見の問題はどうでもよかつたが、婦人運動という群れのリーダーと一緒にされるのが我慢ならなかつた。

一九三〇（昭和五）年になるとフサノはタンジューを閉め、上海に渡つてみることにした。ミシはせっかく繁盛しているのだからと店じまいを惜しんだが、フサノはミシが大阪でカフェを開き、一年やそこらは心配なくやっていけるだけの金を渡した。

東洋一の大都会にして、魔都ともシンシテイ、罪の街とも呼ばれる上海には、フサノを引きつけて止まない何かが漂つていた。フサノは日本郵船の豪華客船・秩父丸ちちぶがが五月に処女航海に出ることを知り、躊躇ためちうことなく一等の切符を買つた。淑女になるには、まずは一等船客の紳士、淑女を間近に観察することから始めよう。淑女たちは男たちとどのような会話を交わすのだろう。

「アマゾンお케이」の肖像  
小川和久・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）  
定 価：2,310円（10%税込）  
発売日：2022年9月26日  
I S B N：978-4-7976-7416-3

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)